ハイパーインフレーションとノートゲルト : 1920年代初頭のドイツ社会史点描(20周年記念特別号)

著者名(日)	森 義信
雑誌名	大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究
巻	21
ページ	75-105
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005749/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

ハイパーインフレーションとノートゲルト

―1920年代初頭のドイツ社会史点描―

森　義信*

要　　約

ハイパーインフレーション期のドイツでは、高額面のライヒスマルク紙幣やノートゲルトが大量に発行され、市中に出回った。物価の高騰とマルク安の進行するなかで、旧来の紙幣は無価値となり、紙くずとして処分された。預貯金は融解し、金融資産をもった中産階層の人びと、給与所得者や年金生活者の生活は破綻した。

ノートゲルトは、地方公共団体や企業が発行したものである。ライヒスバンクが必要量の公の紙幣（ライヒスマルク紙幣）を発行することができなかったからである。ノートゲルトは、地方のコミュニティでしか流通しなかったが、公の通貨に替わる価値ある役割を果たした。本稿では、ハイパーインフレーション期におけるノートゲルトの発行状況が叙述され、また券面の分析がなされた。

一般庶民は、未曾有の困難に遭遇した。筆者は、彼らがこの時代をどのように生きたのかを、点描してみた。この際、同時代人の証言、当時撮影された写真、雑誌に掲載された風刺画などが史料として用いられた。

はじめに

ハイパーインフレーションの時代、ドイツでは何が起こり、人びとはどのように日々を送っていたのか。小説家シュテファン・ツヴァイクは、その著書『昨日の世界』のなかで、身のまわりで見聞した範囲のことを記述しつつ、「これらの変化の様相のすべてをはっきりと著述することのできる経済学者は、私の感じからいうと、その緊張の度において容易にあらゆる小説を凌駕できるものと思われる。渾沌はいよいよ空想的な形をとったからである」（ツヴァイク，p. 432）と述べている。

事実は小説よりも奇なりとは、よく言われることであるが、実際に破局や渾沌の渦に巻き込まれた場合、目の前に展開する事実をしっかりと受け止め、これを冷静かつ克明に書き留められる者はほとんどいないのではないか。そこに、歴史的体験を教訓化することの難しさが内在している、としてもよかろう。

本稿では、このハイパーインフレーションという空前絶後の危機の時代を、ドイツ市民はどのように生きのびたのかを、主として「通貨」を切り口として探っていく。

*大妻女子大学　社会情報学部

1．使用した資料、書物について

事態はどのようなものであったのか。

この難題に挑戦するだけの力量は、もとより、筆者に備わってはいない。しかし、知りたいという欲求だけは人一倍つよく持っているつもりである。この衝動に駆られて、筆者はまず、当時のドイツあるいはオーストリアに居住、滞在していた人びとの書き残したものにあたってみた。

イギリス人文学者クリストファ・イシャウッド[i]の『救いなき人々』や『山師』、ユダヤ系オーストリア人作家シュテファン・ツヴァイク[ii]の『昨日の世界』、ユダヤ系ドイツ人社会学者ヴァルター・ベンヤミン[iii]の『書簡集』、あるいはブルガリア生まれのユダヤ人文学者エリアス・カネッティ[iv]の『耳のなかの炬火』、トーマス・マン[v]の小説『混乱と若き悩み』やインフレーションに関する講演録や書簡、さらに1920年代初頭、ベルリンに駐在していた若き日の外交官加瀬俊一の回顧録『ワイマールの落日』を読んでみた。この過程で、ユダヤ系ドイツ人哲学者ゲオルク・ジンメルの『貨幣哲学』にも手を伸ばした。

これらすべての男性の書き手は、後段でも言及するが、何が起こっているのか、高額紙幣を毎日どのように手に入れ、どのように日々を凌いでいたのか、正確には思い出せないでいる。男性知識人たちは、物価が騰貴して食料が入手困難となり、多くの人々が飢えに苛まれている状況下でも、机に向かい筆をとっている。家族のために食料を入手し、調理して食卓に並べることは、今も昔も女性の仕事であったからであろう。

そうした男性たちの書き残した文字情報だけでは足りないと感じていた矢先、ハンス・オストヴァルト[vi]が1931年にベルリンで出版した『インフレーション風俗史』という本に、当時撮影された多数の写真が収録されていることを知った。本書を入手することは困難と思われたが、インターネット上で捜したところ、カリフォルニア芸術書研究所の廃棄本を、古書として購入することができた。インフレーションに見舞われていたドイツの国民生活や街中の風景を切り取った数多（あまた）の写真が、文字資料以上に多くのことを物語ってくれている。

さらにもう一冊、マサチューセッツ工科大学のドイツ文化学教授ベルント・ウィディクの『ヴァイマール期ドイツにおける文化とインフレーション』という書物に出会った。ウィディクは、本書において、戦間期ドイツにおけるポピュラーカルチャーとインフレーションの問題をリンクさせて考察するという、斬新な手法をとっている。その章別構成は以下のとおりである。

序論
　第１章　マネーにまつわること：文化とインフレーション
Ⅰ部　歴史と体験
　第２章　大惨事を弄ぶ：ドイツのインフレーション1914－1923
　第３章　日々の暴発：カネッティのインフレ論
Ⅱ部　マネー
　第４章　ゼロという記号：マネーとインフレ
Ⅲ部　時代の肖像
　第５章　異様な体験：『賭博師マブゼ博士』
　第６章　労働についてのヴィジョン：シュティンネス評価の二重性
Ⅳ部　インフレーションの収支勘定
　第７章　文化資産の減価：インフレと知識人の悩み
　第８章　魔女のダンス：ジェンダーとインフレーション
Ⅴ部　エピローグ
　第９章　後遺症：インフレ、ナチズム、そして…

本書は、導入部でインフレーション期の統計資料を用いた一般的概観をおこなったのち、ハイパーインフレーションが人びとに及ぼした実際的かつ心理的影響に迫るべく、文学作品や社会学者の著作を縦横に用いている。さらに著者ウィディクは、オストヴァルトの上記『インフレーション風俗史』から当時撮影された写真を、また『ジンプリチシムス Simplicissimus』[vii]や『デア ヴァーレ ヤコブ Der Wahre Jakob』[viii]といった当時の

風刺雑誌からは戯画を、さらに1922年に制作・上映された映画『賭博師マブセ博士　大賭博師・時代の肖像』『賭博師マブセ博士　地獄・現代人のゲーム』をも、時代の様相を知る貴重な史・資料として、分析の対象としている。

激浪に呑み込まれた人びとがどのように生きたのか、という設問に応えるべく、本稿は、多くの史・資料をウィディクおよびオストヴァルトの書から借用しつつ、論を進めて行く。この際、券面にイラストが施された当時発行のノートゲルトや、筆者が脱稿直前に手にすることができたG. D. フェルトマンの1000ページをこえる大著『大混乱　1914－1924　ドイツのインフレーション期における政治・経済・社会』に収録された写真や図版をも、ヴィジュアルな資料として採用し、これらを読み解く作業を、おこなってみた。

また、ハイパーインフレーション時代のノートゲルトの発行状況や販売・蒐集事情などについては、前稿「ノートゲルト学事始め」脱稿後に入手することができた、ウルリヒ・クレファー編集の『ノートゲルト』を参照した。本書は、新書版で、冒頭30頁弱をノートゲルトの発行事情に関する記述にあてており、後半200頁強を、著者が蒐集したノートゲルトを類型別に配列しつつ、これに簡単な注釈を付け加えた体裁の書物である。

2．1920年代の幕開け

第一次世界大戦の敗北後、ドイツ社会はヴァイマール政府のもとで、政治的にも経済的にも混乱の極にあった。ヴァイマール政府は、巨額の賠償金問題の処理や戦争犠牲者の救済、戦時債務の利払いなど、重い財政負担を強いられ、紙幣の増発を続けざるをえない状況にあった。

2.1　生きるためなら何でもやった

イギリスの文学者クリストファ・イシャウッドは、1930年の秋から1933年の冬にかけて滞在したドイツの帝都ベルリンで体験した日々を書き綴った作品『救いなき人々』のなかで、第一次世界大戦とそれに続くインフレーションの時代に、ドイツ人やユダヤ人がどのような体験をしたかを、聞き書きしている部分がある。

> 「若い技師で、僕［イシャウッド］の［英会話の］生徒の一人であるクランプ君が、大戦と、それにつづくインフレーション期に過ごした少年時代の話を、してくれた。戦争も末期になると、汽車の窓の革紐類は、一つ残らず、消えてなくなった。みんなが切って行って、皮革として売ってしまったのだ。上から下までことごとく、客車の被覆布類でつくった洋服を着て、歩き回っていた男女さえある。クランプの学校友達の一団が、ある晩、工場へ押し入って、調帯皮という調帯皮を、あらいざらい盗んで行ったというようなこともある。誰も彼もが、盗みをした。自分の身体も含めて―売れるものは、なんでも売った。クランプの同級生で、十四のある少年は、学校の合間合間には、街へ行って、コカインを密売していた」（イシャウッド, p. 321）。

ハイパーインフレーションの時代は、自分の身体も含めて、もっている物を切り売りして生きていくか、盗みであれ麻薬の密売であれ、犯罪に手を染めてでも生きる道を探るしか方法が無かった。オストヴァルトの『インフレーション風俗史』に収録されている写真のなかに、ブロンズ像が盗まれてしまった公園の噴水や錠前が取り去られてしまった民家の玄関先が、当時のベルリンで良く見られる光景として紹介されている（Ostwald, p. 47, 67）。

同じベルリンでも繁華街のクアフュルシュテンダムでは、様相はいささか異なっていたようだ。

> 「1920年３月、ベルリンはダンスに浮かれ、セックスに溺れていた。麻薬もさかんに流行していた。…エロ雑誌が氾濫し、クアフュルシュテンダムに密集するレストランやキャバレは、ジャズとヒット・ソングとヌード・ショウで熱気がムンムンしていた。だが、華麗なのは表面だけであって、生活の実相は暗澹としていた。要するに、現実の地獄を忘れ

んがための娯楽天国だった。…敗残無力のドイツは社会不安に散々に痛めつけられて、みなヤケになっていた。それに、マルクが下落していた。1ドル4.20マルクだったのが、［1920年に］75、1922年には400にさがった」（加瀬，p. 110）。

図版① 「食料雑貨店前に行列する女たち」オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 254，ベルリン、Sennecke 撮影

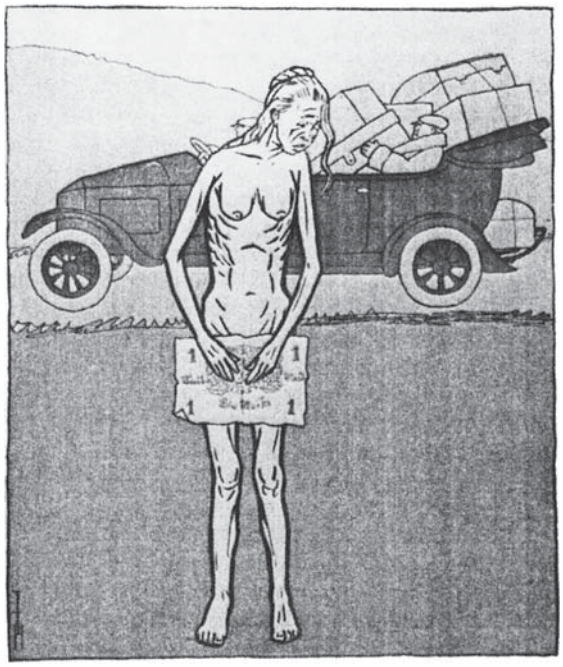
この写真を読み解いてみよう。100人を遥かに越える行列のなかに男性はほとんど見当たらない。前のほうに並ぶ女性には高齢者が目につくが、中ほどには若い女性、母親らしき女性も見出せる。カメラマンのほうを向く女性たちの顔に笑みはない。

ドイツは第一次世界大戦で200万人の兵士が戦死し、420万人が負傷したと言われている。女性の多くが戦争寡婦となるか、独身であることを強いられた。戦時中、70万人の女性がドイツの重化学工業分野で就労していたが[ix]、終戦以降、帰還兵にその職場を明け渡すこととなった。1920年代初期のドイツでは、意に反して家庭に押し戻された女たちが、インフレーションの吹き荒れるさなか、家族の食と安全を確保することに日々悪戦苦闘していたのである。

写真のなかに男たちが見当たらないのは、買い物が女の仕事と定められていたからだけではない。男たちは職場で働いていたか、ストライキやデモに血道をあげていたのだが、食料確保のために職場を抜け出して並ぶことはめったにしなかった。女たちは、その日の割当量のパンや肉を受け取るために、数時間も立ち並ぶ。何が手に入るか、自分の番まで品物が残っているか、苦難と消耗を強いられる仕事は、もっぱら女たちが受けもったのであり、そのおかげで男たちは商店の前に行列を作るという「恥」から距離を置くことができた（Widdig，p. 199－200）。

図版② 「貧困化した中産階級の人々は大事にしていた持ち物を売却しなければならない」オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 90，ベルリン、Sennecke 撮影

この写真からも時代の様子を見てとることが可能である。19世紀末から20世紀初頭にかけて登場してきた、ホワイトカラー層を核とするドイツの中産階級は、戦後のインフレーションで最も打撃を被った人たちである。写真に写る少々お年を召されたご婦人がたは、いずれも知性を感じさせる品の良い人たちである。一人二人では恥ずかしくてできないことも、大勢でバザーのような形でやればなんとかなるかもしれない。そんな思いで開いた即売会であるが、その表情は一様に沈んでおり、先行きへの不安や落胆の様子が見て取れる。机上には豪華な装丁の書籍、テーブルクロス、彼女らの手許近くには、宝飾品や香水の壜、グラス、葉巻の箱などが並べられている。買い手はインフレで大儲けした、知性も教養もない輩や外国人であったろうか（Widdig，p. 72－73）。



図版③　「まる裸にされたゲルマーニア」トーマス・テオドーレ・ハイネ作の戯画、『ジンプリチシムス　28号』（1920　4／21）

図版③には「息子たちがなにもかも脅し取ってしまい、露出した陰部を被うためにたった１枚の惨めたらしい１マルク紙幣を残していった」とのキャプションが添えられている。

この戯画を史料として解読してみよう。イラストの後景に、物品を満載したフォード車に乗る裕福そうなアメリカ人が描かれている。雑誌発行時（1920年４／21）のドイツでは、消費者物価指数が、1913年を100として1200～1400と急騰し、対ドル為替相場は60～70マルク前後、開戦時に較べ１／10から１／15に下落している。アメリカ人をはじめとする外国人がやってきて、家具調度品から書画骨董にいたるまで、ドイツの貴重な品々を買い漁って行った[x]。上のイラストは、ドイツを擬人化した女性「ゲルマーニア」が、憐れな恥ずべき姿となり果てている様を描きだしている。ドイツ人は、自分たちのマネー「マルク」の価値が下落し、そのことによって、あたかもドイツそのものが「凌辱された」と受け止めたに違いない。この恥辱は深い心の傷となり、これを癒すための営為が、その後長く激しく続けられることとなる（Widdig，p. 60－65）。

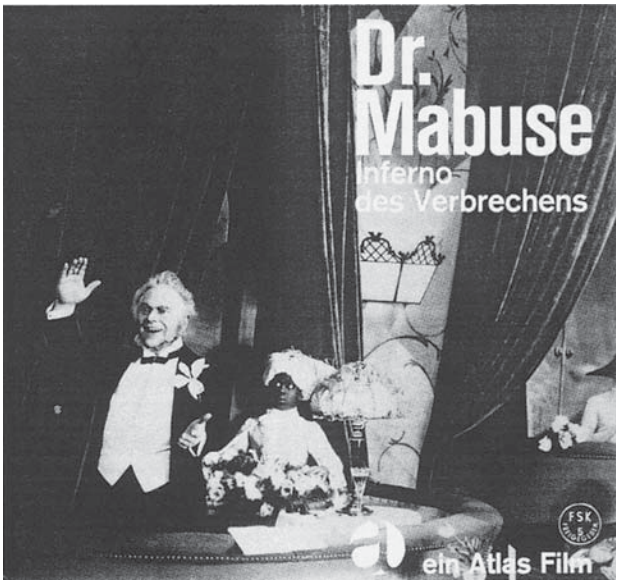
2.2　株式投機・博打・麻薬・売春

ドイツ経済は1919年に賠償景気によって短期的な景気の回復を見た。その後1920年から22年にかけてドイツの工業生産は20％の成長を示し、戦前の７割にまで回復した。失業率も１％という完全雇用に近い状況となった[xi]。同時期の世界全体の工業生産指数がマイナス15％であったことと好対照をなした。この好景気を背景に、ドイツの株式市場は荒っぽい乱高下を繰り返しつつ高騰を続けていた。

トーマス・マンは『混乱と若き悩み』のなかで、「まるでアラジンが魔法のランプを持っているような運勢」の強い相場師・投機家のことを書いている。その相場師はある歯科医の息子で、シャツの釦（ボタン）に真珠を付けている。自家用自動車をもち、友人を集めて夜な夜なシャンパンを抜いて晩餐を振る舞う、また「ささやかな思い出のために」と称して、友人知人に黄金と螺鈿（らでん）を鏤（ちりば）めた高価な品をプレゼントする[xii]。圧倒的多数の人々が日々の食料に事欠くなか、使いきれないほどの財を得て、周囲にばら撒く成金もいたのである。

この時期のドイツの世相は、フリッツ・ランク監督の『賭博師ドクトル・マブゼ』[xiii]によく描きだされている（図版④）。マブゼは精神分析医である。彼は株式市場にガセネタをバラまいて株価を操作し、瞬時にして巨利を掴む。続いて彼は、闇商人や賭博師、売春婦が集うキャバレやクラブに出入りし、金持ちを選んでは賭博場に誘い込む。映画は、インフレが進行し、物価が高騰するなか、有り余るほどの金をもつ者が毎晩享楽に浸っている情景を描き出している。

マブゼは、カードゲームの最中、相手の心を操り、大金をせしめる。株式市場や博打場の異変に気づいた警察は、辣腕検事ヴェンクに捜査と犯人逮捕を命ずる。マブゼの犯罪を追及するヴェンク検事は、増大する需要がうむインフレ状態や貨幣価値の極端な下落が引き金となって、人びとは投機や賭博に熱中するのだとの結論にいたり、犯人＝敵は単に個々の賭博師、犯罪者ではなく、時代そのものだとしている。「戦争の破局によって人間が地獄の胎内からもぎ離された時代、それが堰



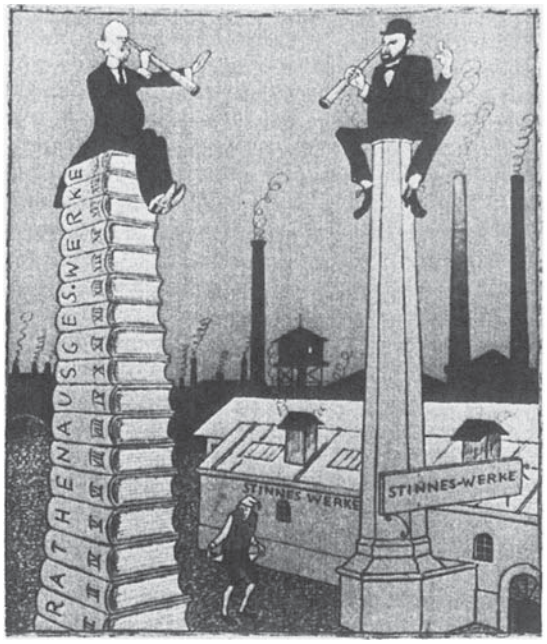
図版④　『ドクトル・マブゼ　地獄・現代人のゲーム』『フリッツ・ランク・コレクション、クリティカル・エディション7』p. 28より

を切って世界と故国に氾濫している」と嘆じている[xiv]。

2.3　ラーテナウとシュティンネス

この困難な時代、1920年5月から1921年10月まで、第一次ヴィルト内閣において復興大臣を務めたのがヴァルター・ラーテナウ（1867－1922）である。彼の父親はAEGという総合電機会社の創業者であり、ラーテナウ自身も若くしてこの会社の社長に就任している。このユダヤ系ドイツ人実業家は、すでに大戦中、陸軍省戦時原料局の局長として、戦時統制経済に辣腕をふるい、敗戦の混乱期には、企業防衛のために500万ドルの私財を投じて、義勇軍を組織した億万長者である。その実践力を買われて戦後の困難な時期に、復興大臣を拝命したのであった。ヴィルト内閣崩壊後の内閣で、彼は外務大臣のポストを引き受け、ヴェルサイユ条約の緩和という困難な外交交渉の任にあたったが、1922年6月、右翼のテロルに倒れた（大澤武男，p. 65f.）。

図版⑤を読み解いてみよう。左が政治家ラーテナウ、右はシュティンネス。ラーテナウが「ここからなら状況は実によくわかる」と言えば、シュティンネスは「いやこっちからさ」とやり返して



図版⑤　「先見の明のある二人」トーマス・テオドーレ・ハイネ作のイラストレーション、『ジンプリチシムス　26号』（1922　2／22）掲載

いる。ラーテナウが坐しているのは彼の著作全集、シュティンネスは彼が経営する工場の煙突に座り、ラーテナウのほうを向いている。背景に描かれているシュティンネスの工場の煙突からは煙が吐き出されており、フル操業であることがうかがえる。図版の下方にドイツ人ミカエルが小さく描かれており、両方のポケットをひっくり返して、からっ欠であることを表現しているが、上方の二人はまったく気づいていない。イラストは、彼らが一般庶民に無関心であったことを表しているのであろう。

ラーテナウは上のイラストに描かれているように、多くの著書・論文を書いてはいるが、知的営為だけで伸し上がってきたわけではない。彼はドイツ民主党の設立にも尽力したし、『新しい経済』を著わし、労資協調を説いてもいる。私利私欲を捨てドイツ再建に身を投じたと言える。

シュティンネスは、ルール工業界の指導的立場にあって、利益を次々と投資にまわして1600もの企業をおさめる巨大なコンツェルンを築き、投資の神様と崇め奉られる一方、悪評高きインフレ利得者の象徴的存在ともされた（Widdig，p. 138－139）。

2.4　シリーズシャインの発行とノートゲルト投機熱

1920年、銅貨の金属としての価値が額面を上回りRegensburg, Traunstein, Wasserburg, Würzburgなどのゲマインデが、小額コインの不足を補うべく、1プフェニヒ、2プフェニヒの緊急紙幣（ノートゲルト）を発行した。このほかに、土地の小売業者が地域限定・店舗限定のノートゲルトを発行している。「飲食店プフェニヒ」「パン屋プフェニヒ」のほかに、「印刷屋」「薬屋」「ビール醸造業」「電報電話局従業員食堂」専用のプフェニヒ紙幣が発行されている。生活協同組合の割引サービス券も小額貨幣として流通した（Klever，p. 12）。

同じ年に始まった蒐集家向けの「シリーズシャイン」は、券面に描かれている多色刷りの絵が続き物であるところから、こう呼ばれているが、額面が75，90，99プフェニヒなど、実際の使用には不適切なものであり、材質的にみてもビーレフェルト市の麻や絹を使ったシャインなど、蒐集家の投機熱を煽るようなものも多数販売された。

当時はどこの町でも、本屋や商店のショーウィンドに彩色のシリーズシャインが飾られていて、ノートゲルトを取り扱う専門的な店が数百もあったという。なぜならば、物価高騰のあおりを受けて店頭に商品が並ばない時代に、ノートゲルトだけは品薄ではなかったからである。貨幣価値が下がり続けている不確かな時代だからこそ、将来値上がりするかもしれない物に換えておきたいという欲求はリーズナブルである（Klever，p. 20）。

どこの町にもノートゲルトを扱う響きのよい名前の商店があった。ハルツの古銭・切手商連盟は「国際ノートゲルト銀行、ヴォルフガンク・ハルツ古美術商会」を創立した。新発のノートゲルトを蒐集家に知らしめるために『ノートゲルト相場』、『ノートゲルトマーケット』、『ノートゲルト学』、『ノートゲルト展望』、『ノートゲルト国際相場』といった雑誌が次々と創刊された。人々は希少価値があるかもしれないし値上がりするかもしれない、新発のノートゲルトを見境なく、一つものがさず、持ち金の続くかぎり買い続けたという（Klever, p. 21）。

株式投資に参加できるほどの資力をもたない一般庶民は、一攫千金を追い求める風潮のなかで、ノートゲルトを購入して値上がりを期待した。彼らはまた、路上で店開きしている賭け屋に群がり小銭をかけたり、トトカルチョに淡い期待を寄せたりしては裏切られ続けていたのである[xv]。

2.5　シリーズシャイン悪評の理由

ノートゲルトを買い集めてきた蒐集家たちのなかには、既発のノートゲルトの再発行を企図するゲマインデに抗議するとか、発行団体を通貨偽造の廉で国家機関に告発する一方、貨幣本来の機能を喪失した「シリーズシャイン」―古銭鑑定士が、ノートゲルトに数えることはできないとする「募金シャイン」、「記念シャイン」、「ジョークシャイン」、「回想シャイン」、「広告用シャイン」―に対して批判を強め、あるいはこの新発のノートゲルトを認めず、自分のコレクションに加えないと主張する者も多かったという。当時すでに、古くからの蒐集家や純粋の古銭収集家にとって、ノートゲルトは信頼のおけないものであり、とりわけシリーズシャインの詐欺的発行こそ、悪しきノートゲルトの典型だとされた。

シリーズシャインが詐欺的だとして悪評だった理由は、有効期限が短期に設定されており、事実上、シャインを現金に交換することができなかったからである。シリーズシャインは理屈の上では小額の貨幣として地域内で使用できたのであるが、シャインが発行団体たるゲマインデから卸売商人・取扱業者・顧客リストから蒐集家の手に渡るという長い過程を経る前に、シャインは既に有効期限切れとなり、実際のところは貨幣としての性質を失っていたからである。また、シャインの発行者にとって好都合なことに、実際の日付より数年も古い日付にすることもできた。そうすることでシャインは、決して回収・換金されることはなかったし、見掛け上は古いノートゲルトであると思わせることもできた[xvi]（Klever，p. 22）。

評判の悪かったシリーズシャインではあるが、視覚的印象やテーマの多様性、ものによってはそ

の高い芸術性のゆえに、投機の対象となっていた。そのせいもあってシリーズシャインは、共同体はおろか文化団体、保養所、展示会主催者によっても印刷・発行され、それどころか、実在しない都市や共同体の名を騙(かた)って発行されるものさえあった。

ノートゲルトへの需要が大きかった分だけ、シリーズシャインの供給も大規模になされた。現在、世界中の古銭市場で「未使用」「極美品」のノートゲルトが売買されているのは、このせいであり、筆者が歴史資料として分析対象としているものの多くも、この時期のものである。

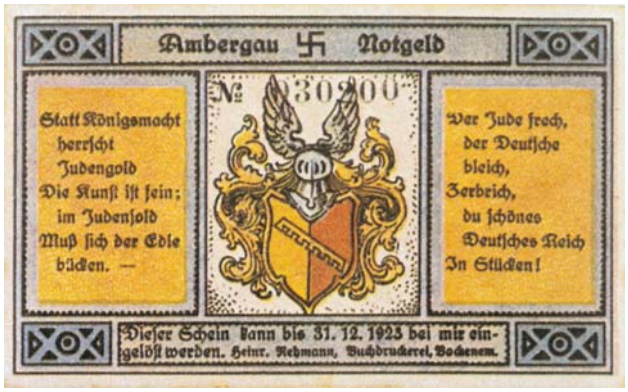
図版⑥　大学都市イェーナの「文化とスポーツ週間 12.—24. August 1921」作者不明、EURO DECO, p. 255より。

図版⑥は、1マルクのグートシャイン（ノートゲルト）であり、券面には1921年10月1日までに、当該文化・スポーツ協会窓口で換金しなければ失効するとある。ポスターのようなデザインであり、文化とスポーツ週間の開催に先立って発行された、資金協力を要請する趣旨の印刷物と解釈できる。これは、おそらく古銭鑑定家の言う「公告用シャイン」に分類されうるもの、したがってノートゲルトとは言い難いものの一つである。

2.6　券面の製作過程と世相を伝える券面

ノートゲルトの製作・発行の発議は、共同体自体の場合もあれば、業者による提案の場合もあった。発行数を確保したり、使用範囲を広げたりするために、周辺のゲマインデを誘って共同で行う場合もあった。発行するシャインの券面のデザインについてはコンテストが行われ、当該市長や郷土博物館長らが加わった委員会が選考にあたり、多くの場合、地元出身の芸術家の作品が採用され、券面の印刷所も地元の工房が選ばれたようである。

券面に描かれた絵画から受ける印象は、全体としては、伝統的・物語的・歴史主義的である。まれにユーゲント様式(シュティール)、さらにまれには現代印象派的な絵画に出くわすこともある。切り絵、木版画、写真製版もある。ナショナリズムが強調され、大ドイツが好まれた。フリードリヒ大帝、ビスマルク、ゲーテはシャインにしばしば登場している。低地ドイツ語の使用によって郷土との結びつきが強調され、辛辣なユーモアをもって悪しき時代が描かれている。



図版⑦　Bockenem in Hannover のノートゲルト、ボッケネンのハインリヒ・レーマン印刷所

図版⑦の券面の左右の欄に「王の力に代わってユダヤの金が支配している。芸術は素晴らしい、貴顕の士はユダヤ人の金貨にひれ伏さざるをえな

い」、「ユダヤ人はふてぶてしくドイツ人は青ざめている。麗しのドイツ帝国は分断されている」と、ナショナリズムを鼓吹する文面が見いだされる。上部にアムバーガウのノートゲルトの文字、その中央にハーケンクロイツ、下部には「このシャインは1923年12月31日まで［ライヒスマルクに］換金できる」とある。紙幣の表面（おもて）には50プフェニヒの額面が記され、ヤミ商人の天国とされる温泉保養地の絵が描かれている。ユダヤ人や悪徳商人を痛烈に揶揄する券面となっている。

この種のナショナリズムや反ユダヤ感情を煽る当該時期の券面はほかにもあり、「汝、ドイツ人であることを自覚せよ」（Neusadt i. Holstein）、「このノートゲルトシャインでドイツの商品だけを購入せよ」（Neustadt an der Orla）といった文言も散見できる。

図版⑧　1921年、ホルシュタインの Itzehoe 市発行の75プフェニヒ・ノートゲルト

図版⑧のシャイン券面左端に、有効期限が1921年９月30日までとあり、券面全体には、イツェホーエ市の1921年の物価が、1913年に比して、石炭が19倍、豆炭が17倍、木材は16倍、泥炭が21倍、電力料金が８倍、都市ガスは10倍、ガソリンは31倍、固形石鹸は20倍、粉石鹸25倍とある[xvii]。1921年12月のドイツ全体の消費者物価指数は19倍、卸売物価は35倍となっており、他の欧米諸国に比して、すでに危険水域をはるかに越えていた（Widdig，p. 42－43）[xviii]。

2.7　1922年の事態―ライヒスマルクとノートゲルト

翌1922年度末になると、1913年を１として、消費者物価は685倍、卸売物価指数は1,480倍、桁外れの上昇となった。1922年の１年間だけをとると、前者が36倍、後者が42倍にも跳ね上がっており、文字通りハイパーインフレーションが本格化した。

経済学者にして通貨改革の断行者でもあるシャハトの言によれば、この間の事情は次のようなものであった。「間断なき価値低落が絶えず新しい印刷を必要とした」が、「帝国銀行は十分な紙幣を事業界に提供することができなかった。…その結果地方自治体並びに民間の緊急貨幣の印刷は時を追って、ますます行われ始めた」。「1922年７月17日の法律は、緊急貨幣の発行を調査し、大蔵大臣の許可、並びに現金並びに大蔵省証券の形における保証を帝国銀行に預金することを必要とした」（シャハト，p. 100f）。この法令によって、常軌を逸したシリーズもののノートゲルトの発行は禁じられ、通常のノートゲルトの発行には許可と預託金が必要とされた。

ノートゲルトは、シャハトに言わせると、「帝国銀行が連邦郡市町村、私企業に対してさえそれぞれ独立的に鋳造［ママ］して流通に投ずることを奨励したところのあの印刷した着色紙片」ということになる。そうである以上、この緊急紙幣は、国家の要請に基づいて発行されているのであり、また後段で見るごとく、貨幣として実際に機能していた点で、禁止されたシリーズシャインとは次元を異にしているとして良かろう。

ハイパーインフレーション期のシャインの発行数は７万から８万、ラント、管区、郡、都市、ゲマインデ、銀行、大会社のいずれもがインフレーション貨幣を発行した。鉄道管理局、郵便局もこれに加わる。シリーズシャインの発行禁止措置は、巨額ノートゲルトの印刷時代の開始を告げるものであった。1922年末には額面1,000マルクの緊急紙幣が発行された[xix]。

紙幣（パピアゲルト）への不信が増すほどに、人々は救いようのなきことを悟った。1922年11月

１日、オルデンブルクの国立銀行は150キログラムのライ麦を実物価値とするグートシャインを発行した。その意図するところは、穀物・脂身・砂糖・木材・石炭・１立方キロのガス・純金といった実物の価値を、安定した貨幣として発行することにあった。ポェスネック Pössneck 市で発行したグートシャインは皮革そのものであり、靴の踵や靴底が、25金プフェニヒ、50金プフェニヒ、あるいは1.5金マルクと記されて、貨幣として用いられた（Klever，p. 17）[xx]。

1922年末になると、オルデンブルク以外にも、メクレンブルクやシュヴェリンでもライ麦証券、コークス公債、石炭公債、苛性カリ公債、褐炭公債、キロワット公債など、金以外の物的価値証券が発行された。土地公債の構想もあったが流動性が低く実現しなかった（シャハト，p. 72f., p. 75）。

図版⑨　ニーダーラウジッツ地方同盟発行の20ポンドのライ麦グートシャイン、1923年９月。

図版⑨には、20ポンドのライ麦とだけあり、マルクとかプフェニヒの金額表示が無い。細かい文字であるが、この証書を現金化する場合には、ベルリン穀物取引所の相場にしたがって支払いがなされるとある。券面の下部には、同盟に加わっている管区内町村の責任者10名の署名がなされている。また、有効期限「1924年９月１日まで」の文字が消され、「裏面記載日まで」と手書きで訂正されている。

ジンメルが『貨幣の哲学』のなかで述べているように「印刷された小さな１枚の紙切れと引きかえに貴重な事物を手放す」ということは、その紙切れへの信用と信頼が必要不可欠の前提になっていた。物品との交換を裏付けとする、上記のごとき物的価値証券の発行は、国家の造幣した紙幣への信認が崩壊したことの端的な現れであった[xxi]。

３．1923年、ハイパーインフレーション期のシャイン

3.1　紙幣があふれ預金が溶けて消えた

1923年初めには額面５万マルクの緊急紙幣が発行された。同年２月１日の対ドル相場は41,500マルク、その後いったん半値戻しがあったが、６月１日以降は下落の一途をたどる[xxii]。

「そうした折も折（同年３月）、フーゴー・シュティンネスが禁を破って大量のドル買いを始めたのが端緒となって、一時やや沈静していたマルクの落勢は、奔流のように激烈になり、阻止するすべもなくなった。企業家は争って暴利を占めたので、苦悩する大衆は彼らを＜インフラチオーン・シーバー Inflation　Schieber インフレ悪徳商人・詐欺師＞と呼んで憎悪した。労働者と資本家は反目し、勤労階級は企業不信を唱えたが、同時に、右翼の台頭にも本能的な不安を抱いていた」[xxiii]（加瀬，p. 123）。

前年に始まるハイパーインフレーションに拍車をかけたのが、1923年１月のフランス・ベルギー両国軍によるルール地方への進駐だとされる。

「ドイツは消極的抵抗をもって対抗したが、…ルールは鉄、石炭の宝庫で、重工業の本拠である。これを奪取されたうえに、巨大な失業者群を養うのは、破産状態のドイツには不可能である。そこで、政府は紙幣を増刷したから、インフレが加速され、１ドルが１月に7,000マルクだったのが、７月には16万マルク、８月には百万マルクという調子で下落し、ついには天文学的数字になり、中央銀行は一日に460億マルクの紙幣を発行するにいたった。…元来、庶民は質実勤勉で貯蓄をよくした。それが、煙のように消えてしまうのである」（加瀬，p. 115）。

図版⑩　「紙幣よりパンを、パンを」作者不明。『ジンプリチシムス　28号』（1923　6／11）掲載の戯画

図版⑩では、集中豪雨による洪水のように、溢れる紙幣に埋もれそうな女性が、男児を両腕で抱え上げている。男の子は、手足が細く、あばら骨が浮き上がるほどに痩せこけている。インフレーションが進行するなか、物価が高騰を続けると商店主は売り惜しみをするようになる。金があっても物が買えない事態がうまれ、子供の栄養失調や餓死が相次ぐ。家事を取り仕切る女性たちは、予想をはるかに超える物価に日々直面し、これと闘うことになる。

加瀬は続ける

「ブルノ・ワルターが私［加瀬］に語ったのだが、彼は交響曲の演奏を中断して、楽団員を外出させねばならなかった。正午に給与を受け取ると、その足で急ぎ買い物をする。なんでもよいから買う。さもないと夕刻にはマルクの購買力は半分か３分の１に減ってしまう。ある団員は１日の給料で１袋の塩を買ったが、翌日には半分しか買えなかったという。だから、みな食糧を買い漁り、ヤミ商人がはびこった」。

「外人ならば、月百ドルあれば、王侯の生活をした上に美酒美女はもちろん、美術骨董品を欲しいだけ買えたものである。インフレの犯人はだれか。ドイツ人は苛酷な賠償を課した連合国だという。クレマンソーは百年かかっても損害―500万の死傷、５千の被害都市、２万の破綻企業―を賠償させると放言していたから、これも一理あるが、ワイマール政府には故意にマルクを下落させ、国債を帳消しにし賠償を回避する底意があった、と解釈する消息筋もいる。…新興財閥・大企業…はインフレによって借金が消滅するのを歓迎したのは事実である。だが、その犠牲になったのは国民大衆であって、彼らにとってはインフレは革命よりも悪質な脅威だった。この結果、彼らはフランスを憎悪し、国民を救済して偉大なドイツを再建する英雄の出現を、痛切に待望した」（加瀬，p. 115－116）。

戦後のインフレーションに最後のだめ押しを与えたこのハイパーインフレーションは、木村靖二によれば、貯蓄を消滅させ、中間層を中心とする金利・年金生活者、家主など不動産所有層の基盤をうばった。賃金や給与は支給直後ただちに物に換えなければならず、いっぽう、小売業や農民が価格上昇をみこして売り惜しみ、販売制限、供出拒否あるいは物々交換にのみ応じるといった情景がひろくみられた（『世界史体系　ドイツ史３』p. 148）という。

1923年８月10日、クノー内閣のインフレ対策における無能ぶりが露呈したので、ベルリンの労働者は印刷工組合を先頭にストライキに訴えた。このため、紙幣の印刷がとまり、社会の混乱は絶頂に達した。

同年11月、シュトレーゼマン内閣のルーター蔵相はダルムシュタット銀行頭取ヒャルマール・シャハトに通貨改革を依頼した。シャハトは金（きん）と土地を担保にしてレンテンマルクを発行し、１ドルが４兆２千億マルクに下落していたインフレ為替相場を終息させ、4.2マルクで安定させることに成功した。12個のゼロを消去し、１兆旧マルクを１新マルクと交換したのである。

緊縮政策が強行され、しばらくは倒産が続出し、ベルリンのナイトクラブの灯も暗く、街頭にあふれていた売笑婦の姿も減ったが、やがて外国

資本が大量に流入するにおよんで、経済活動は旺盛になり、中央も地方も競って公共投資、企業拡張に没頭した[xxiv]（加瀬，p. 164）。

3.2　シャインの大量発行

レンテンマルクの発行に先立つ1923年７月中旬、小売り＝販売業者は、最初は占領地帯において、遅れて南ドイツにおいて、そしてその後は全国を通じて、ライヒスマルク紙幣の受理を拒んだ。小売商人は１日のある特定時間のみならず、１週中の特定日に商売を停止しはじめた。かくて通貨の破局は更に進展して食料および他の供給品の途絶へと進んだ。商店の前の長蛇の列、略奪、暴動が各地で頻発し、1923年９月27日非常戒厳令が敷かれた（シャハト，P. 70）。

先に2.7で触れた、実物価値紙幣＝物的価値証券は、レンテンマルク導入以前から存在していたが、レンテンマルク紙幣が十分に行き渡らない時期に、かえって本格化した。Traunstein では、資力の劣る階層向けに額面５，10，50プフェニヒの馬鈴薯ノートゲルトが発行された。それは1917年に小額貨幣として発行されたものを刷り直したものであり、市内で利用された。

図版⑪　ポンメルン地方の管区グループ Greifenhagen 発行の５ツェントナーライ麦証券

図版⑪の券面を見ると、発行の日付1923年10月26日が手書きされ、さらに券面の左端に「このシャインは、ユダヤ人ないしはユダヤ人との混血の手にある場合、無効である。ドイツはドイツ人のものである」とある。子細に見ると、この文言のうち「ないしはユダヤ人との混血」の文字が消されている。いずれにせよ、この物的価値証券＝ノートシャインが、ここでも反ユダヤ的プロパガンダに利用されていることがうかがえる（Klever，p. 17）。なお１ツェントナーは50kgである。

1923年10月より、政府はノートゲルトシャインの発行を、ライヒスバンクに国庫証券を預託することを条件に工業所にも許可したが、必ずシャイン券面に「金」・「金マルク」・「ドル」による額面保証をうたうこととされた。併せて、券面には「ノートゲルトシャイン」の文字、財務当局による認可の記載、シャイン保有者が公告の後、額面相当の国庫証券ないし現金に交換できる旨の記述があることとされた。（Klever，p. 18）

図版⑫　Bielefeld 市発行の１ドル＝4.20金マルクノートゲルト

図版⑫の券面は実に賑やかで饒舌である。「4.20金マルク保証」の文字が券面の周囲を取り囲む。左のペリカンの周囲には「ライヒスマルクもパピアマルクも終わり」とあり、「ドイツの統一に尽力せよ」ともある。券面下部の左から右方向へ「ドイツ人よ、汝が自助努力をすれば、神は汝を助け給う」とか「働き節約せよ」の文字が躍る。クレーファによれば「決死の覚悟で戦った兵士たちの聖なる赤い血潮を忘れるな」の文字もあるとされるが、筆者には文字が細かすぎて読みとれない（Klever，p. 84－85）。

1923年に地方自治体によって発行されたこの緊急貨幣の量は巨大な額に膨れ上がり、帝国銀行券流通に対して重大な意味を加えてきた。ノートゲ

ルトの発行団体は560箇所、3,000種にのぼり、政府の定めた保証準備はますます無視されるところとなった。ライヒスバンク自体は上記図版⑫のごとき額面保証のノートゲルトを受け入れようとしなかった。

それは、シャハトの言によれば、緊急貨幣の発行が「インフレーションで利得を得るに最も安易な方法であったので、地方自治体ばかりか、特に大民間事業において多分に且つ好んで行われた」（シャハト，p. 102）所為であったからである。しかし他方、「1923年の狂暴的な価値低落に際し緊急貨幣は不十分な帝国銀行券の供給を補うのに大きな役割を演じたばかりでなく、信用提供」の点でも意義を有したとするなど、緊急紙幣の大増発に対して、シャハトの筆致は必ずしも否定的とばかりは言えなかった。

かくして「ルール占領の間、ライヒスバンクからの貨幣の正規的供給が著しく困難になっていた占領区域においては、殊に、緊急貨幣の発行は極めて大規模に行われた。1923年11月１日以降、ノートゲルトシャインの額面は〈兆〉となり、中旬には若干の都市では100兆、200兆紙幣が印刷された」（Klever, p. 16）。

図版⑬、⑭　超高額ノートゲルト、Wetzler の１億マルク、Trier の５億マルク

図版⑮、⑯　Magdeburg-Neustadt の100億マルク、Bamberg 市の１兆マルク緊急紙幣。

図版⑬―⑯の券面には「ミリオン　百万」「ミリアルデ　十億」「ビリオン　兆」という吃驚するような単位が躍っている。1923年９月～11月にかけて発行されたもので、ヴェツラーの紙幣の有効期限は公告で示すとあり、トリアーは1924年４月１日まで、マクデブルク-ノイシュタットとバンベルクの券面には明示が無い。バンベルクの券面には「声の大きな威張り屋が国の至るところから現れ、自慢げにビリオーネンシャインだと嘯(うそぶ)いた。そ奴は、経済という沼地の湿り気のある毒キノコのように、巨大な数字として成長を遂げる。ビリオーネンマルク？詐欺的な数字だ。だが、我が時代は数兆倍もの苦難をもたらしており、数兆の嘆きが渦巻いているし、飢えと涙が人生行路を満たしている。病める国家における最後の専制君主たるビリオーネンシャインという毒キノコが死ねば、健全な時代が再来し、我々を沼地から乾いた小道へと導いてくれる」とある。

3.3　ノートゲルトの発行停止と回収命令

1923年11月17日、ライヒスバンクは全支店に回状訓令を発し、11月22日以降、もはやいかなる種類であろうと緊急貨幣は各支店で受納せざること、また緊急貨幣発行諸団体は11月26日までに、帝国銀行の手元にある緊急貨幣を買い戻すよう請求さるべきことを命じた（シャハト，p.103）。

これは、「通貨の不統一（ライヒスバンク銀行券、レンテン銀行券、金公債証券、緊急貨幣等々）ができるだけ急速に解消され、ドイツ国内に通貨統一が恢復される必要があった」（シャハト，p. 126）ためである。

1923年末にかけて、貨幣の価値がなおも急速に失われていたため、給与は週に３回支払われたという。２プフェニヒの銅貨が金属価値として62万5000マルク、郵便はがきの切手代が100億マルクであった。そのようなわけで絶えず新札が印刷されねばならなかったし、ライヒスバンクは既発の貨幣について償還資金も保証もなく、133の民間印刷業者に仕事をさせていたにすぎなかった。民間企業も独自の貨幣を発行し、当時150億枚のシャインが印刷されたと推計される。印刷に費やせる時間が無かったので、インフレーション期のシャインはすべて、美しくもなければ藝術的でもなかった。古いシャインに新しい金額を入れて印刷したものさえある。インフレーションの終息後、ひとびとはこれらのシャインを古紙として重さ売りした（Klever，p. 16）。

図版⑰「価値の無くなったライヒスマルクや緊急紙幣は古紙として売買された」、オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 67

図版⑰　桁の小さい古い紙幣は無価値となり紙くずとして処分された。少年が箱一杯に詰め込まれた古紙を足で踏み固めている。上記のようにはがき１枚の切手代が100億マルクであれば、プフェニヒ紙幣はもとより、1,000マルク、10,000マルク紙幣も、１銭、１厘の価値もないということである。写真に写る大人たちの表情は深刻そのものである。

1923年12月末より翌年７月に入るまで、多数の発行団体が続々と彼らの発行してきた通貨の回収に努めた。50兆、100兆マルクといった高額の額面保証ノートゲルトがレンテンマルクと並存したが、徐々に旧券は駆逐され、50レンテンマルク、100レンテンマルク相当と見做されて交換された。

「緊急通貨の発行総額は、金マルクとして10億近いものと概算せられている」が、1924年１月末には総額が５億マルクまで減少し、４月上旬には２億5,000万、６月中旬には１億弱、９月中旬には1,000万マルク、10月末には既発緊急貨幣の全部が一掃されたと見做すことが可能となった」（シャハト，p. 132－133）。

レンテンマルクの裏付けは金の保有高にあった。ライヒスバンクは、1923年12月31日に４億6,700万マルクの正金を保有しており（シャハト，p. 127）、1924年４月の金及び外国為替の保有総額は、５億9,200万マルク、７月には９億7,700万マルク、８月には12億5,600万マルクとなった（シャハト，p. 164）。このうち「金準備は、1924年６月：４億4,800万マルク、７月：４億6,600万マルク、12月末：７億6,000万マルク、1925年３月：10億を超えた。その大部分をニューヨーク、イギリスとスイス、小額をスウェーデン、フランス、ロシアで購入したという（シャハ

ト，p. 210)。

4．1923年を人びとはどのように生きたのか

「マルクの価値が世界市場で刻々と変化するほどに急降下したのは、ドイツに課せられた天文学的な戦争賠償のせいである。1923年の初頭対米ドル7,424マルクであったものが、８月にはレートは100万を突破し、11月には6,000億、12月には４兆2,105億マルクに急落した。35のライヒスバンクの印刷機は、昼夜を問わず動いたが、需要を満たしインフレーションに負けないだけの、新しい額面の紙幣を十分に印刷できず、ノートゲルトないし緊急紙幣が日々市町村や企業によって氾濫のごとく発行された。公式のライヒスバンクの紙幣は事実上無価値であったから、緊急貨幣も言うまでもなくそれ以上に無価値であった。信念に基づいた投資は別だが。［しかるに］ノートゲルト紙幣は交換の手段として用いられ、商品やサービスに交換できた。政府の認可のもと、地方や私的な組織は安価に、たいていの場合は新聞の印刷機で、古紙や厚紙の上に紙幣を印刷できた[xxv]。(『ユーロ・デコ』p. 254)

ハイパーインフレーション期に発行された額面の大きなノートゲルトは、蒐集家の投機対象にすぎなかったシリーズシャインとは大いに異なっていた。それは、需要に見合った数量の紙幣の印刷と発行を行えないライヒスバンクに代わって、地方自治体や企業によって発行され、公共事業費や給与として支払われたからである。この地域限定、期間限定のノートゲルトは、隣の市町村では受け取りを拒否されたが、「地域通貨」としては本来の貨幣に匹敵する役割を果たしていた。

図版⑱　「１万マルク紙幣は両替しません」ベルリン、オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 269.

ただし、ノートゲルトもライヒスマルク紙幣と同様、ハイパーインフレーションの影響を免れず、日々その価値を喪失していたので、超高額紙幣を手にした者は直ちに何か別のものに換えておかなければならなかった。

図版⑱はベルリンの両替商の店頭に貼られた広告やステッカーとこれに群れる人びとを写しだしている。「両替」の文字と並んで「１万マルクは両替しません」とあるが、群がっている人たちが見ているのは、それよりも下の「両替リスト」である。この大版の紙には種々の紙幣が貼られているところから、ライヒスマルクやノートゲルトの交換レート、外貨の為替レート、金(きん)の価格などが具体的に示されているのであろう[xxvi]。彼らもまた、少しでも有利な外貨に両替をし、あるいは金(きん)に換えて、僅かな金融資産を保全しようと必死であったのである[xxvii]。

１万マルク紙幣については、興味深いエピソードが、トーマス・マンによって語られている。彼は、大戦中の1917年、友人が所有する別荘に１万マルクを出資し、ゲストとしてしばしば利用する権利を得、実際に利用もしてきた。ところが1923年になって、友人がこの別荘を諸般の事情から売却することとなり、その旨を伝えるとともに、かつて手渡した１万マルクを戻してきた。その紙幣の束は、友人が貸金庫にでもしまっておいたのであろうか、６年前に手渡したピン札であったから、マンは目を白黒させたという次第。ハイパーインフレーションによって、投資した貨幣の価値は失われてしまっているが、別荘は逆に相当の高額で売却されたはずである。それなのに、友人は手渡した紙幣をそのまま返却してきた。「マルクはマルク」あるいは「昨日のマルクは今日のマル

ク」という原則を振りかざして、借金を帳消しにできた人たちと、金融資産を融解させてしまった人たちとの対照が鮮明となるエピソードである[xxviii]。

4.1　どうやって生きていたか覚えていない

1923年当時、ベルリンに居住していたW.ベンヤミンは、9月28日付けの書簡のなかで「大都市では、状況は日々に深刻になっています。たとえばぼくらの地域では、ほとんどの交通機関がストップしているので、…住居を都心に確保することから始めなくてはなりません」と書き、10月24日付けの書簡では「ともかく現在のベルリンはまったく耐えがたい。ひとびとの憤懣も、絶望も、ともに深刻であり、その深刻の度は最近の急激で全面的な食料不足によって、いっそう加わりました」（ベンヤミン『書簡集Ⅰ』p.161f., 165）と書いている。

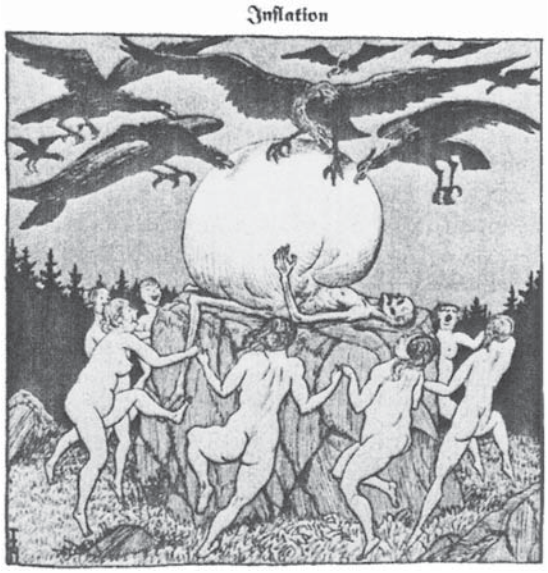
さらにユダヤ系ドイツ人たるベンヤミンは11月18日の書簡の中で、次のような悲痛の叫びを発している。

「ユダヤ人は語るべきではありません。（ラーテナウの死に内在する深い必然性は、ぼくにはとうから明瞭でした。…）…中略…ドイツにいて真剣に精神的活動に従う人間は、冗談ではなく、飢えに迫られる。餓死に迫られる、とまでは言いませんが、…飢えにもさまざまな種類がある。しかし、餓死しつつある民族のなかで飢えること、これは最悪です」（『書簡集Ⅰ』p. 166－168）。

ベンヤミンの書簡のどこを読んでも、ベルリンでの生活がどのように耐えがたいのか、食料事情がどのように深刻で、日々何を食べて飢えをしのいでいたのかは、皆目分からない。我々が知りたい情報が、ここには見出せない。男は厨房に立つことが無く買い出しもしないからなのか、市民生活の様子が見てとれない。

ウィーンに居住していたシュテファン・ツヴァイクは、困難な時代のオーストリアとドイツとをつぶさに体験している。彼の言はベンヤミンに較べればはるかに具体的である。彼はラーテナウ暗殺時のことを次のように語っている。

「私はこの日すでにウニスターラントに行っていた。幾百人もの浴客が陽気に岸辺で水を浴びていた。今度もまた、フランツ・フェルディナント大公の暗殺が知らされたあの日と同じように、音楽堂で何の心配もない避暑客たちの前で演奏が行なわれていたとき、白い海燕のように新聞売子たちが散歩道に殺到して来た。＜ヴァルター・ラーテナウ暗殺さる！＞恐慌が勃発し、それは全国を震憾した。一気にマルクが暴落し、幾兆という空想的な気違いじみた数字に達するまで、もはや止まるところを知らなかった。今や初めて、インフレの真の魔女饗宴が始まったのであり、それに比べれば、われわれのオーストリアのインフレは、それでもすでにばかばかしい１対15,000という比率ではあったが、貧弱な子供の遊びめいたものにすぎなかった。その真相をひとつひとつの例や信じられないような例をもって物語るには優に一冊の本が必要であるが、そのような本は今日の人々にはお伽噺のような印象を与えるであろう。朝に新聞一部のために５万マルクを払い、夕べには10万マルクを支払わなければならないよう



図版⑲　「インフレーション」トーマス・テオドーレ・ハイネ作の戯画『ジンプリチシムス27号』（1922　11／８）掲載

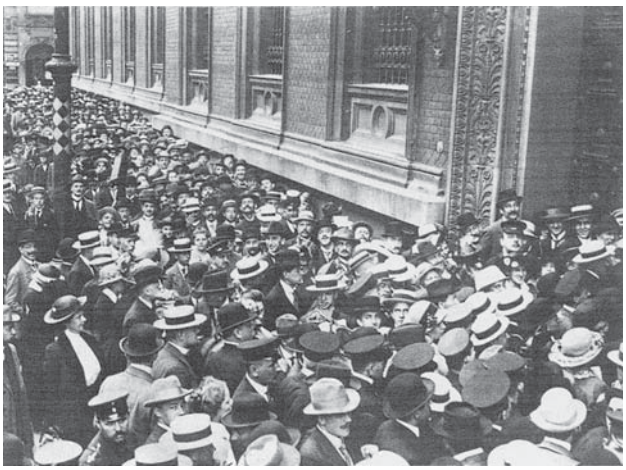
な日々を、私は体験したのであった。外国貨幣を換えなければならぬ人は、両替を時間で区切ってやった。というのは、４時には３時の数倍を手に入れ、５時にはまた、60分前に手に入れた数倍を手に入れたからである。たとえば私は、１年間仕事をした原稿を出版社に送って、１万部に対する即時前払いを要求することによって、まず安心だと思っていた。ところが小切手が手に入ってみると、それはほとんど１週間前の小包の切手代をもカヴァーしなくなっていたのである。電車では幾百万という金を支払い、荷車が紙幣を国立銀行から市中銀行へ曳いていった。２週間後には10万マルク紙幣は下水溝に見出された。乞食がそれを軽蔑して投げ捨てたのである」（ツヴァイク，p. 460－461）。

図版⑲の戯画は、魔女たちの饗宴風景に托して、経済と社会の迫りくる破局を暗示している。図版中央の膨脹しきったお腹の死体は、飽食による肥満の結果ではなく、長引く飢餓による痛ましい症状を示すものである。痩せこけた手足がその何よりの証拠である。死体の上を旋回するハゲワシは、民衆の窮乏を糧にして生きる、インフレーション利得者を象徴している。彼らは餓死した民衆をなおも責め苛（さいな）まんとしている。このイラストを見る者は、死者の膨満したお腹が、いまにも粉微塵に破裂するのではないかとハラハラするであろう。それほどに破局が迫っているのである。イラストの上半分は、マネーは膨張すればするほど、その価値を減ずるというインフレーション自体の矛盾した性質を暗喩し、インフレーションがもたらすであろう経済的惨劇を記号化しているとして良かろう。

膨満した死体の周りで踊る裸婦たちは、惨劇をよそに笑いこけ、身体全体で快楽を表現している。インフレーション自体を魔女の踊り、魔女の饗宴（サバト）に譬（たと）える風潮があるが、それはインフレーションの時代に巨利を得た者たちが催す乱痴気騒ぎ、官能的にして無秩序な反道徳的饗宴と一脈通ずるものがあるからであろう（Widdig, p. 203－205）。

4.2　取り付け騒ぎから預金の融解へ

1923年という年は各地で銀行への信用不安が増大し、取り付け騒ぎが起きている。



図版⑳　「取り付けでごった返す国立銀行前　1923」『ヴァイマール　イン　ベルリン』p. 60.

図版⑳の写真を子細に見てみると、取り付けの噂か情報に接した預金者が、取るものも取りあえずに駆けつけたようには思えない。ライヒスバンクに押し寄せたのは、背広にネクタイ、山高帽子を被り、口髭をたくわえ、どこから見ても裕福な階層の人びとである。なかに女性の姿も目に付くが、これもおしゃれな花飾りや羽根のついた帽子を被り、あるいはきちんと髪形を整えている淑女たちである。銀行の扉近くに立ち並ぶ男女の顔に見られる笑みや余裕は、いったいどこからくるものなのか。カメラを向けられた人が思わず微笑んでしまう、いわゆるカメラ目線というやつであろうか。警察官や警備を担当する者の姿が見出されるが、この時点では混乱は生じていない。いずれにせよ、ここに集まった人びとの多くが、全ての金融資産を失うことになるとは、まだだれも気づいていない。

図版㉑を見てみよう。帽子をかぶりコートに身をつつんだ裕福そうな人たちが銀行に入って行く。富裕層は開戦時から銀行の窓口で戦時国債を購入し、金・銀などの供出を行い、その見返りに長期国債を受け取り、奨励される貯蓄にも励んで

図版㉑ 「銀行というビジネス」ヴィルヘルム・シュルツ作のイラストレーション、『ジンプリチシムス　28号』(1923　11／19) 掲載

きた。右側の出口からは、身ぐるみ剥がされた男女が続々と吐き出されてくる。振り返る一人の男性の表情は恨めしそうである。この戯画を掲載した『ジンプリチシムス　28号』は、ハイパーインフレーションが終焉を迎えつつある時期のものである。金融資産を持っていた中産階級の殆どすべてが裸同然にされてしまった。銀行というビジネスは、この一枚の絵が物語るように、金融資産をもつ者によって支えられつつ、いざという時には彼らから全てを奪うものでもある。このぞっとするような絵は、ナチス時代の絶滅収容所のガス室前に並ばされた、あの裸のユダヤ人たちにリンクしているようで、不気味である（Widdig, p. 229－230)。

4.3　パンとスープを求める「群衆」

ブルガリア生まれのユダヤ人小説家カネッティは、1913年にウィーンに移住し、ナチス・ドイツによるオーストリア併合の際にも、まだウィーンに留まっていた。そのカネッティが『耳のなかの炬火』において、ハイパーインフレ時代のドイツに関して次のように回顧している。

「折しもインフレーションがその絶頂に達した時期であり、ついには一兆倍にまでなった日々の物価の暴騰はあらゆる人間にとって極端な—かならずしも等しいとは言えないが—結果をもたらした。それを見まもるのは恐ろしいことであった。生起する一切のことが、しかもじつに多くのことが生起した唯一の前提に、つまりほかならぬ急速なテンポで進行する貨幣の価値下落に左右されたのである。人びとの身にふりかかったのは無秩序というも愚かであり、それは日ごとの爆発のようなものであったし、何かがある爆発から生きのこったとしても、次の日にはそれは別の爆発に巻きこまれてしまうのであった。私はそのもろもろの効果を単に大きなスケールで見ただけではなく、あからさまに近くで、例の家庭のどのメンバーのうちにも見た。最もささやかな、最も私的な、最も個人的な出来事がいつも貨幣の荒れくるう変動という同一の原因を有していたのである（カネッティ, p. 65)。

図版㉒ 「救世軍の給食活動1923」『ヴァイマール　イン　ベルリン』p. 61

図版㉒の写真は、救世軍による給食活動に集まる人びとを写している。車の荷台に掲げられた標語には「この野戦炊事車に寄与する者は報われる」とある。第一次世界大戦後、大都市ベルリンには職を求めて多くの人々が流入し、住宅不足も深刻化していた。失業者、ホームレスが地に溢れ、日々の食事に事欠く人も数多かった。ドイツ

人らしい、という表現を安易に使ってはいけないのであろうが、貧しいながらも身形をきちんと整えて、食器を両手に静かに施与を待つ。伏し目がちの表情からは、恥をしのぶ無念さがうかがわれる。銀行の前に押し寄せた人びとや商店の前に行列を作っていた主婦たちとは、明らかに異なる階層の人々ではあるが、ハイパーインフレーションに翻弄され、人生をめちゃくちゃにされた点では皆一緒であった。

図版㉓　Thoeny の風刺画、『ジンプリチシムス』（1922年、号数は不明）掲載、The Great Disorder,p. 552より転載

図版㉓を見てみよう。ハイパーインフレーションによって、高い教育を受けた者と労働者階級との社会的位相は大きく変動した。新しいプロレタリアートともいうべき貧困化した知的労働者が、元祖貧困者ともいうべき風情の者に、温かい一杯のスープをどこで貰えるのか、尋ねている。零落したとはいえ、彼はメガネをかけて口髭をたくわえ、背広にネクタイ、革靴を履きステッキを持っている。その顔にはなお威厳を漂わせているが、服はよれよれで、身体も空腹のせいか傾いている。

トーマス・マンは著書『混乱と若き悩み』のなかで、次のようなことを書き記している。主人公コルネリウスは、歴史学の正教授として月給数百万マルクを得ているので、幸い電話も家も失わずに済んでいるが、「以前の中産階級の上の部の人々がいま生きている環境は概ねかうしたもの［電話を売却せざるをえなかったり、家屋を手放さざるをえなかったりしているの］で、昔の俤はなかった。かれらは貧しく、苦しんでいた。衣服は着古してみな裏返していた」。主人公は大学教授としての生活レベルを辛うじて維持しつつ、若い学生たちを自宅に招いて飲み物や煙草、食事を振る舞い、また賑やかにダンスパーティを催させてもいる[xxix]。

金融資産をもつ中産階層に属する人びとも、大学教授などの知識人や小説家、文化人も、善意の炊き出しを求めて長い行列に並ぶにいたった。カネッティは、このインフレーションの過程が、「ふだんは物質的な利害において甚だしい格差のある人たちを無差別に巻き込んでしまう。賃金生活者も金利生活者も同じように打撃を受ける。人びとは、銀行に安全に保管されていると信じていたものの大部分あるいは全部を一夜にして失なうこともある。インフレーションは永遠なものに見えた、人間たちのあいだの差別を廃し、以前には通りで会っても会釈をかわすことなどほとんどなかった人びとを、同じインフレーション群衆に糾合するのである」と述べ、広範なこの新しく生まれたプロレタリアートが「群衆」に糾合されていく様を詳述している。

しかるに「いかなる人間も、自分自身の突然の価値低落のことを決して忘れない。それはあまりにも痛ましい出来事だからである。かれはそれを誰か他の者に押しつけることができない以上、残された人生をその思い出を抱きながら送る。そして、群衆自身も自らの価値低落を決して忘れない。その後に起こる自然の傾向は、人びと自身よりもいっそう価値の低いあるもの、軽蔑された人びと自身が今度は逆に軽蔑してやれるようなあるものを発見しようとすることである」（カネッティ「インフレーションと群衆」p. 272－73）として、地獄にいたるさらなる破局を予言するのであった。

4.4　ツヴァイクの回想

ツヴァイクの『昨日の世界　—ヨーロッパ人の回想』は、彼が亡命先のアルゼンチンで自死の直前に、ウィーン時代の日記も資料もメモもなく、記憶だけを頼りに書き上げたものである。思い違いもあろうし忘れてしまったことも、不正確なところもあるに違いない。それにもかかわらず、20世紀前半のヨーロッパに関する彼の証言は、様々な分野の研究者によって高く評価されてきた。我々のテーマに関してもそれは同様であり、この書には傾聴に値する証言が文字通り目白押しなのである。本稿においてツヴァイクからの引用が多いのはそのためである。

> 「最も奇妙なことは、今日どうやってみても、私どもがこれらの歳月にどうやって家計を立てていったのか、一体どこから次々とオーストリアでは一千クローネ、一万クローネを、またドイツでは百万マルクを手に入れたのか、もはや一向に思い出せないことである。しかし、不可思議きわまることに、人々はそのような金額を持っていたのである。人々は渾沌に慣れ、それに適応した。論理的にいうと、あの時代をともに体験しなかった外国人は、鶏卵一個がオーストリアでは以前の高級乗用車一台分の値段であり、後にドイツでは40億マルク—およそ以前における大ベルリン全体の家屋の基本価格であった—もしたというような時代には、きっと女たちは髪をふり乱して気違いのように街路を走ったであろうとか、誰ももう何も買えないので店は荒廃していただろうとか、何よりも劇場や娯楽場は完全にからつぽであったにちがいないとか、想像しないではおられぬであろう。ところが驚くべきことに、事情は全く正反対であった。生きつづけようとする意志は、金(かね)の不安定よりも強いことを示したのである。財政的渾沌の真直中で、日常生活はほとんど乱されないままでつづいていった。個々に見れば変化ははなはだしかった。たとえば銀行の預金や政府紙幣は融けてなくなったので、金持は貧しくなり、投機家は豊かになった。しかし車輪は、個人の運命とは無関係に、同じリズムで廻転し続け、何ものも静止してはいなかった。パン屋はパンを焼き、靴屋は長靴をつくり、作家は本を書き、農夫は土地を耕し、列車は規則的に通い、毎朝、新聞は定まった時間に配達され、おまけに娯楽場、酒場、劇場は人であふれていた。というのは、かつては最も安定したものであった金(かね)が毎日その価値を失ってゆくという、予期しなかったまさにそのことによって、人々は人生の真実の価値を—仕事、愛、友情、藝術、自然—を一層高く評価したからである。（ツヴァイク，p. 436－7）

ツヴァイクの証言に異議を差し挟むわけではない。ただ彼が「女たちは髪をふり乱して気違いのように街路を走っ」てはいなかったというとき、筆者はそこに違和感を抱くのである。わずかな食糧や燃料を手に入れるために、女たちは必死になっていたはずであり、そうしなければ、ツヴァイクのいう「日常生活」を一日たりとも続けられなかったであろうからである。

したがって、商店が開いたとの情報に接すれば、女たちは走ったであろうし、両替屋の店先に「ドル紙幣、ポンド紙幣あります」との張り紙が出れば、男たちは我先にと馳せ参じたはずである[xxx]。ツヴァイクの知らないところで行われる、そうした庶民たちの形振(なりふ)りかまわぬ努力の上に「日常生活はほとんど乱されないままでつづいていった」のであろう。

4.5　庶民の生活①　物に換える、只同然の家賃

ハイパーインフレーション時代の庶民の生活に関するツヴァイクの証言は続く。

> 「まもなく何びとももはや、何か或るものが一体どれだけの価値があるのか、分らなくなった。価格は勝手に騰貴した。一箱のマッチが、機を失せずに価格を上げた商店では、実直な男が無邪気にまだ昨日の値で売っている店より、20倍も高かった。安いほうの店では、正直さの報いとして、一時間のうちに店がからっぽにされてしまった。人から人へと

話が伝わり、誰もが走って行き、必要であろうとなかろうとおかまいなしに、およそ売るものを何でも買ったからである。一匹の金魚、一台の望遠鏡でも、＜物＞は物であった。各人は紙のかわりに物を欲するのであった」

「最も奇妙な成りゆきを示したのは、家賃の不均衡であった。家賃については政府は借主（それは広範な大衆を含むものであるが）の保護のために、家主の損にはなるが、値上を禁じたのである。まもなくオーストリアでは、中くらいの大きさの住居は丸一年間に、家賃としてたった一回の中食代ほどもかからなくなった。全オーストリアは実のところ五年乃至十年のあいだ（後には家主が契約解除を申し渡すことも禁止されたので）多かれ少なかれ只も同然で住んだのである」。

「このばかばかしい渾沌ぶりによって、一週一週と情況は気違いじみ、非道徳的になっていった。40年間こつこつ貯め、更にその金を愛国的に戦時公債にあてた人は、乞食になってしまった。負債を持っていた人は、それを返済した。正確に食糧配給を守っている人は飢えた。図々しくそれを破る者だけが飽食した。賄賂の手を知っている者は事を進め、投機する者は利殖をあげた。慎重に計算する者は欺かれどおしであった。金のこのような融解と蒸発とのなかでは、いかなる尺度も、いかなる価値もなかった。ただひとつの徳しかなかったのである。すなわち、手際よく、要領よく、狐疑逡巡せぬことである。そして疾走する馬に踏みつぶされるかわりに、その馬の背に飛び乗ることであった」（ツヴァイク，p. 432－433）。

インフレの時代には、金（かね）はできるだけ早く物に換えておくこと、金融資産は融解し、不動産収入はあてにならないこと、食糧配給だけに頼ってはならないこと、賄賂を使い、投機を行い、利殖に励むこと、慎重に計算したり狐疑逡巡したりせず、疾走する馬の背に飛び乗るくらいの手際良さ、要領のよさが求められる、という次第である。

4.6　庶民の生活②　肉を売ってもらう、家庭菜園

続いてはイシャウッドに登場してもらおう。インフレーション期のベルリンに関する彼の聞き書きによれば、

「百姓と肉屋とは、万能といってもよかった。野菜や肉をもらうためには、どんな下らない彼らの気紛れでも、ちゃんと満足させてやらなければならぬ。クランプ［前出］の一家は、ベルリン郊外の小さな村に、一軒、肉屋の知り合いがあって、ここにはいつでも肉があった。ところが、この肉屋というのが、一種独特な性的倒錯癖の男で、その最大の好色的満足というのが、育ちのよい、敏感な女たちの頬を、つねったり、叩いたりすることだった。そんな風にして、フラウ・クランプのような、ちゃんとした奥様を、恥ずかしくていたたまらなくさせると思うと、もうなんともいえぬ興奮を感じるのだった。そして、この気紛れを満足させてやらないと、絶対に、彼は、商売に応じない。そんなわけで、日曜日毎に、彼女は、子供たちを連れて、村へ出かけて行くのだが、少しばかりのカツレツやビフテキを売ってもらうためには、じっと我慢して、つねられたり、ぶたれたりしているのである」（イシャウッド，p. 321－322）。

このエピソードからは、食糧を生産する人びとが、都市生活者の死命を制するほどに強力な存在となったことがわかる。いたって弱い立場に追い

図版㉔　「都市生活者の自助努力」ベルリン、オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 268

やられた都市の住民たちは、家庭菜園やベランダで食用植物を栽培し、鶏や兎を飼育した。アパート住まいの人たちは、市の提供する空き地を耕して食糧生産に乗り出した。

図版㉔の写真でも、警備兵を別にすると、男性の姿は若干確認できるにとどまる。逞しく頼りがいのある中年女性たちが鍬をもって集まっている。この空き地を開墾した後で、各家庭用に畑地として配分するのであろう。

400ha 足らずの大都市ベルリン市内で、11万人以上の小農園主が家族と一緒に、部分的にはレジャー用菜園として、また非常時には生きていくために必要な食糧確保に有効利用できる畑として、狭い土地を耕作していた。花も花キャベツ［カリフラワー］も栽培できたから、飢餓の時代には自分の菜園で採れる野菜を食べて切りぬけることも可能だった。1920年代に、ますます多くの住民が経済危機に巻きこまれるようになると、家庭菜園は生きのびるための必要かつ重要な要素となった[xxxi]。

4.7　庶民の生活③　売り惜しみ、買い溜め、物々交換

食糧事情は逼迫の度を深めて行くし、インフレの進行は留まるところを知らない。ツヴァイクが描いたウィーンの状況は次のようなものである。

「初めて私は、飢餓というものの黄色の危険な眼を見た。パンは黒くてぽろぽろで、瀝青（れきせい）と粘土の味がした。コーヒーは大麦の煎汁で、ビールは黄色い水で、チョコレートは色のついた砂で、馬鈴薯は凍っていた。たいていの人々は、肉の味を完全に忘れてしまわぬために、家兎を飼育し、われわれの庭では若い男が、日曜の御馳走用に小さな栗鼠を射った。栄養のきいた犬や猫は、長目の散歩をしたあとでは帰還することが稀れであった」（ツヴァイク，p. 429）。

「道徳の一般的な崩壊とともに、どの農民も、バター、卵、牛乳を法律で定められた＜最高価格＞で渡そうとは考えなくなった。農民はできるだけのものを物置に隠しておいて、もっとよい値の買手が自分の家にまでやって来るのを待っていた。やがて新しい商売が出来あがった。いわゆる＜買い溜め屋＞である。職のない人々は、一つ二つのリュックサックをたずさえ、農民から農民へと渡り歩き、特に物資の豊富な場所には汽車で行きさえして、非合法で食糧を調達し、それから、それを都会において 4 倍か 5 倍の価格で小売するのであった。農民たちは初めのうちは、彼らの卵やバターと引き換えに家に雨と降って来た紙幣に大悦びで、彼らのほうではその紙幣を＜買い溜め＞たものであった。ところが彼らがいっぱい金のつまった紙入れをたずさえて都市に行き、そこで物を買おうとするやいなや、彼らはその食糧に 5 倍の値段を要求したにすぎないのに、彼らの買おうとする大鎌や鎚や釜のほうは、20倍、30倍と値が上っていることを発見して、憤慨するのであった。それからというものは、彼らはただ工業製品だけを手に入れようとし、実物価値には実物価値を、品物には品物を要求するようになった。人類が塹壕においてすでに幸福にも穴居時代に逆行したあとで、幾千年も続いた金（かね）というものの因襲は消えてなくなり、原始的な物交制度に後戻りしたのである。全国にわたって異様な取引が行なわれた。都会の人々は、なくてもすむものを百姓のところへ引きずって行った。シナの陶器の花瓶、絨毯、サーベル、銃、写真機、書物、ランプ、装飾品などである。そこでザルツブルクの農家に足をふみ入れてみると、驚くべきことにインドの仏像が自分を凝視しているのを見たり、ロココ風の書棚にフランスの革の本が並んでいるのを見出すことができた。新しい所有者たちは、特別な誇りでそれらの本を自慢するのであった。＜本革ですぞ！フランスですぞ！＞と、頬をふくらませて自慢した。実質だ、金（かね）は駄目だ、というのが合言葉となった。多くの人々は、ただ身体を養うために、エンゲージリングを指から抜き取り、革帯を身体からはずさねばならなかった」（ツヴァ

イク，p. 430－31)。

都会の商店に食糧が無いとなれば、農村に買い出しに出かけて行くしかない。農民は紙幣を受け取らないから、都会の人たちは衣類や書画骨董、書棚や書籍まで農村に持ち込む。買い出しをできない人たちのために担ぎ屋、買い溜め屋まで現れる。通貨への信認が消え失せれば、実物経済に立ち戻るのも道理である。

図版㉕　「現代風物々交換経済」、オストヴァルト『インフレーション風俗史』p. 114.

図版㉕は靴屋の店先で、貼り紙には「販売及び修理は食料品との交換で［お願いします］」とある。高価な毛皮のコートを着用した女性は、店主の手元にある靴の修理を依頼したのであろう。代金として太めのブルストを一本差し出しているところである。オストヴァルトの書には、このほか、男性が理髪代として鶏卵2個を渡してる写真、映画を見に来た子供が入場料として圧搾炭2個を払おうとしている写真が収められている（Ostwald，p. 115，118)。

金（かね）の価値が日々下落していけば、住民の貨幣に対する不信の念が増すのは道理である。硬貨が姿を消したのも、一片の銅あるいはニッケルは、ともかくも、単に印刷された紙切れに比すれば「物資」と言えるものだからである。庶民たちは、わずかな資産を守り、生活を防衛するために、物々交換しか方法が無いことを悟る。しかし、それは余りにも非効率的であり、そこに物的価値証券や実物シャインが発行される余地もあった。状況は余りにも目まぐるしく推移し、何が起きているのかをだれも正確に把握できないでいる。

4.8　巨利を稼ぎ出した、時代の寵児たち

庶民の苦悩をよそに、ハイパーインフレーションを機に巨万の富を稼ぎ出した者がいる。その典型がシュティンネスである。

「大儲けをしたシュティンネス Hugo　Stinnes の姿が巨人のようにぬきんでていた。彼はマルク暴落を利用しつくしながら彼の信用を拡大することによって、およそ買いうるものを何でも買った。炭坑、船舶、工場株の束、城、土地などである。しかもすべて全く只も同然にであった。なぜならば、あらゆる契約、あらゆる負債は零になったからである。まもなくドイツの四分の一が彼の手中に帰し、全く道理に反したことだが、つねに眼に見える成功に酔うドイツの民衆たちは、彼に対して天才に対するような歓声を送ったのであった。失業者たちはあちこちに何千と群れてたたずみ、家屋を軒並にマッチ箱を買うようにして買いあさる自動車に乗った買占人や外国人たちに対して、拳を固めるのであった。およそ読み書きのできる者は誰でも、取引をやり、投機をやって儲けたが、同時に次のようなひそかな感情を抱いていた。すなわち、自分たちはみなだまし合っているが、また自分たちも眼に見えないひとつの手によって欺かれているのであり、その手は、国家をその罪と責任から解放するため、この渾沌をきわめて故意に演出しているのだ、という感情であった。私は歴史をかなり徹底的に知っていると信じているが、私の知る限りでは、歴史上いまだかつてこれほどまで瘋癲病院時代を現出したことはなかった。あらゆる価値が変ったのであり、それはただ物質的なものにおいてだけではなかった。国家の指令は嘲笑され、道義も道徳も尊敬されず、ベルリンは世界のバベルと化した。酒場や遊び場や飲み屋が茸のように続々と現われた。オーストリアにおいてわれわれが見たものは、この魔女の饗宴の、おだやかで控え目な序曲にすぎぬものであったのである。というのは、ドイツ人たちは、彼らの激烈さと系統立ったやり

かたを倒錯にまでもっていったからである」（ツヴァイク，p. 462－３）。

インフレーション期には、ありとあらゆるものの額面上の数値が上昇する。預金保有者は保証された高利回りに満足し、投資家は右肩上がりの騰勢に喜色満面、鉱工業、商業関係者も価格改定による好決算に沸き立つ。参加者全員は、貨幣価値の下落という事象がメダルの裏側に隠されていること、したがって「利回り・利益・利得」のすべてが見せかけにすぎないこと、に当初は気づかない。しかし、やがて「自分たちはみなだまし合っているが、また自分たちも眼に見えないひとつの手によって欺かれている」と感じるようになる。

図版㉖「灰の水曜日＜おじゃんになる前に目一杯楽しんでおけ＞」作者不詳、『デア　ヴァーレヤコブ　40号』誌の別冊付録に掲載された戯画（1923　2／16）.

図版㉖のタイトル「灰の水曜日」は、四旬節の初日、死について考えさせ、改悛と懺悔のしるしとして、頭の上に祝別された灰を十字の形に置く習慣のことを指す。それとは真逆の乱痴気騒ぎである。鷲鼻のユダヤ人と思しき男性は、インフレーションの間に大金を掴んだ利得者ないしは投機家であろう。卓上にはすでに酒瓶が何本もからになっているが、なおも乾杯の声を上げてご満悦である。ご相伴にあずかる右手の男性は山高帽子に札を差し挟み、いまグラスをかちんと触れ合わせようと差し出しているところ。乳房も露わな左手の女性もこれに応じようとしている。その隣の仮面で目を隠した女性はユダヤ人男性のジャケットから財布を盗み取ろうとしている。この二人の女性は、当時見られた性道徳の頽廃と貪慾を象徴している。また、イラスト上部に描かれた骸骨＝死神は、差し迫った経済的な破局とそれがもたらすであろう惨劇を予告している。「死を想え」ということであろうが、「死」＝破局が近いからこそ、株式市場や外為市場で稼ぎまくった投機家たちは、猛烈な勢いで金を使いきろうとしている（Widdig，p. 8 － 9）。

終わりに—破局の終息と次なる破局へ

ハイパーインフレーション時代のドイツでは、何が起きていたのか。同時代人の残したナラティヴ・ソース（証言）とヴィジュアル・インフォメーション（映像情報）を頼りに、書き綴ってきた。もとより本稿は、史料に即した研究論文をめざしたものではなく、また筆者にその能力、力量が備わっていないことはすでに冒頭でも述べた。筆者がしたことと言えば、同時代を生きた人々の証言を並べ、写真や風刺画＝戯画をそこに添えただけのことである。ただし、いかなる証言、いかなる映像記録を取り上げ、あるいは取り上げなかったか、というところに、筆者の主観が入り込んでいることだけは確かである。その主観が、ハイパーインフレーション時代の史・資料を残した人たちの、思わくや眼差しと大きく齟齬していないことを祈るのみである。

前段でも述べたが、ツヴァイクは回想録のなかで「女たちは髪をふり乱して気違いのように街路を走ったであろうとか、誰ももう何も買えないので店は荒廃していただろうとか、何よりも劇場や娯楽場は完全にからつぽであったにちがいないとか、想像しないではおられぬであろう。ところが驚くべきことに、事情は全く正反対であった」と書いていた。

「生きつづけようとする意志は、金（かね）の不安定よりも強いことを示したのである。財政的渾沌の真直中で、日常生活はほとんど乱されないままでつづいていった」という。それは「かつては最も安定したものであったが毎日その価値を失ってゆくという、予期しなかったまさにそのことによって、人々は人生の真実の価値を―仕事、愛、友情、藝術、自然―を一層高く評価したからである」とされる。カタストロフを体験した人々が、それゆえにこそ人生の真実の価値を見出すという、この一連の言葉の意味は重い。しかし、それが短時日のうちに忘れ去られてしまうことのほうが、人類にとって実は大問題なのである。

ハイパーインフレーション期の歴史社会学的研究の分野では、近年、賃金・給与の実質的低下はあったが、再三の引き上げや、家賃などが統制されていたことなどから、庶民レベルでの苦境は以前想定されていたほどではなかったとする見解も出ている[xxxii]。その是非を論じることは、別稿に譲らざるをえないが、いずれにせよ、「物不足と生活設計の全面的崩壊に苦しむ勤労者層、国家への信頼をうしなった中間層の心理的打撃は、その後の政治にも大きな影をおとした」[xxxiii]ことだけは確かである。とくに、中間層が消滅してカネッティの言う「群衆」に一体化したことは、ドイツの行く末を大きく規定していったと言える。

---

i　Christopher Isherwood（1904年－1986年）. イングランド生まれ。第一次世界大戦で父が戦死し、その後は母とロンドンで暮らすようになる。イギリスのアッパー・ミドル階級の暮らしを嫌悪し、ベルリンやコペンハーゲンなどヨーロッパ各地で生活したのち、アメリカ合衆国へ渡る。

ii　Stefan Zweig（1881年－1942年）。オーストリアのウィーンで生まれ育ったユダヤ系作家・評論家。長編小説と短編、『マリー・アントワネット』や『メアリー・スチュアート』など多数の伝記文学を著した。第一次世界大戦開戦当初は愛国心に動かされ、オーストリアの戦時文書課で軍務につくが、次第に戦争への疑問を深める。スイスに移り、ロマン・ロランらとともに反戦平和と戦後の和解に向けた活動に従事する。第一次大戦後はオーストリアに戻り、1919年から1934年までザルツブルクで生活した。1933年ヒトラーのドイツ帝国首相就任の前後から、オーストリアでも反ユダヤ主義的雰囲気が強まり、1934年に武器所有の疑いでザルツブルクの自宅が捜索を受けたことを機に、イギリスへ亡命する。

iii　Walter Benjamin（1892年－1940年）は、ベルリンのユダヤ人家庭に生まれ、文化社会学者として、史的唯物論とユダヤ的神秘主義を結びつけた。文芸評論家、思想家、翻訳家、社会学者としても知られる。第二次世界大戦中、ナチスの追っ手から逃亡中、ピレネーの山中で服毒自殺を遂げたとされてきたが、暗殺説もある。

iv　Elias Canetti（1905年－1994年）、ブルガリアで、ユダヤ人の家庭に生まれる。1913年にウィーンに移住し、ウィーン大学で化学を学ぶ。1929年頃に代表作である小説『眩暈』（1935）を書き始める。ナチス・ドイツによるオーストリア併合の際にもウィーンに留まり、ナチス党員や人々の様子を見守った。その後、1939年にユダヤ人迫害を逃れてイギリスに亡命した。亡命後、自らの体験をもとにしつつ、膨大な資料を導入して群衆の解明に取りかかり、1960年『群衆と権力』を発表。1981年にノーベル文学賞受賞。晩年には自伝的三部作『救われた舌』（1977）、『耳の中の炬火』（1980）、『目の戯れ』（1985）に取り組み、若い日々の時代と社会、そして自らの人生を書き記した。

v　Thomas Mann（1875年－1955年）、ドイツの小説家・評論家。1924年『魔の山』、1925年に『混乱と若き悩み』出版、1929年ノーベル文学賞受賞。1933年アメリカ合衆国へ亡命。第一次世界大戦からハイパーインフレーション時代については、Erinnerungen aus

der deutschen Inflation（Gesammelte Werke, 13, 1993, p. 181–190）などがある。

vi Ostwald, Hans. Sittengeschichte der Inflation. 本書は「マルク崩壊期の映像記録」という副題をもち、120枚の写真を収録している。

vii インターネット上で雑誌『ジンプリチシムス』のバックナンバーの購入を試み、古書市場にその存在を確認した。値段もリーズナブルであったので購入を試みたが、ドイツ国外への流出を防ぐ意味合いもあってか、サイト上では購入手続きに進めないとのアナウンスがあった。それゆえ、本稿で使用している図版は、ウィディクの書物からの転用であることを断わっておく。なお、ジンプリチシムスとは、17世紀のドイツ作家グリンメルスハウゼンの『阿呆物語』の主人公の名前である。

viii 雑誌名『デア　ヴァーレ　ヤゴブ』とは、「そのものずばり、どんぴしゃり、本物、ぴったり」といったドイツ語の俗語表現である。社会民主党系の左翼的雑誌で、1923年10月にインフレのあおりを受けて一時廃刊の憂き目をみた。本誌の内容やイラストについては、H. J. Schütz (1977) Der wahre Jacob. Ein halbes Jahrhundert in Faksimiles. を参照した。

ix 戦時中の女性労働の在り方については、北村陽子「第一次世界大戦期のドイツにおける戦時扶助体制と女性動員—フランクフルト・アム・マインの事例—」、『西洋史学』221号（2006）がある。「開戦直後から、少ない食糧のために長時間行列し、ようやく手に入れた食料を乏しい燃料で調理するため、女性たちはほぼ一日を費やしていた。このような家政上のむだを省き、＜戦争による物価上昇を鑑みて、家族の台所に近い形で大量給食をする＞ことで家族全体の健康を向上させるために、…戦時給食センターが開設された」（p. 35）とある。

x そればかりか、本国で食いっぱぐれた英国の年金生活者が、ドイツに来て豊かな老後の生活ができるとか、ベルリンでの１週間の滞在費がたった１ドルであったとか、当時のドイツは外国人にとって天国のようなところであったという。Ostwald, p. 111－129.

xi 失業率については、原信芳「ワイマール共和国前期の失業給付システム」『西洋史学』213号（2004）を参照のこと。

xii トーマス・マン『混乱と若き悩み』p. 321－322

xiii 二部作合計で４時間半に及ぶ長大作である。第三部『怪人マブゼ博士—マブゼ博士の遺言—』はナチズムの台頭に対する警告の映画として製作されたが、ドイツでは上映禁止処分とされた。

xiv『フリッツ・ランク・コレクション、クリティカル・エディション７』小川佐和子「［小説賭博師ドクトル・マブゼの］原作者ノーベルト・ジャックの人物像」p. 16－23を参照。

xv Ostwald, p. 42には、ベルリンの路上でコリントゲームを広げて客を誘っている男の写真やサイコロとばくに客を誘いこんでいる男の写真がある。もっとも、インフレもデフレも関係なく、男という者はなけなしの金を賭けごとにぶち込む愚かさを常に持ち続けてはいる。

xvi シリーズシャインは、ドイツのパピアノートゲルト全体の８％強を占めた。Klever, p. 21.

xvii 券面には具体的な数値があるので、参考までに記しておく。100kgの石炭：3.6㌍⇒68㌍、同量の豆炭：2.5㌍⇒42㌍、同量の木材：2.5㌍⇒40㌍、同量の泥炭：1.5㌍⇒31㌍、100kw光熱費：0.5㌍⇒４㌍、１CM都市ガス：0.18㌍⇒1.7㌍、１㍑灯油：0.2㌍⇒6.25㌍、固形石鹸１個：0.25㌍⇒５㌍、粉石鹸１箱：0.12㌍⇒３㌍。

xviii 同時期の卸売物価指数は、英国が1.8倍、仏が3.5倍、伊が5.8倍であった。

xix 同じ1922年末に１万マルク銀行券が、翌年には10万マルク紙幣、７月には1,000万マルク、2,000万マルク、5,000万マルクの紙幣が次々と発行されている。

xx　本文中で紹介した事例はクレファーの書物からであるが、彼が依拠した事例は、Ostwald, p. 63にもある。

xxi「原始的経済発展段階では、いたるところでさまざまな使用価値が貨幣として登場する。すなわち、家畜、塩、奴隷、タバコ、毛皮などがそうである。貨幣は、それがどのような仕方で発展したにせよ、最初はともかく、ちょっと見ただけですぐに価値をもっていることがわかるような価値物であったにちがいない。印刷された小さな一枚の紙きれと引きかえに貴重な価値の事物を手放すということは、目的系列がきわめて著しく拡大し、しかも信頼しうるものとなることによって、われわれが直接的には価値のないものをもってしても今後確実に価値物を手に入れることができるという場合に、初めて可能となる」ジンメル『貨幣哲学　分析篇』p. 174－175.

xxii　9個のゼロがつくミリアルデ（10億）の位取りをしやすくするために、下3けたのゼロを取りさって、「Tマルク」概念が採用されたことがある。Klever, p. 16.

xxiii 1923年の物価の一例：「赤旗」一部10万マルク；クーダムの売笑婦が「600万マルクと煙草1本」、トーマス・マンの『混乱と若き悩み』では鶏卵1個が6, 000マルクとある。

xxiv 1924年から29年までの間にドイツに注入された外資は250億マルクであって、賠償支払い額は80億マルクである。もちろん米国の投資が多い。つまり、アメリカが賠償の肩替りをしたのに等しい。この結果、見せかけではあったが、ドイツは繁栄し失業者も40万人に減った。

xxv ノートゲルトの芸術性を取り上げた『ユーロ・デコ』からの引用である。同書はこれに続けて「これらの印刷機械は規格がばらばらであったから、寸法も形もデザインも極端にむらがあった。券面から受けるイメージも藝術的なものから幼稚なものまであるという、才能や技術の多様さを反映するものであった。紙幣の多くがプロフェッショナルな芸術家やデザイナーによって美しく表現されたものであるが、なかには素人集団によって殴り書きされたようなものもある」と述べている。『ユーロ・デコ』p. 254. この後に続くページで藝術的にみて優れた出来栄えのノートゲルトを例示している。

xxvi トーマス・マンは、1922年9月付け書簡のなかで「外貨をもたないと、私のところのような家庭では今日もはや生きて行けますまい。誰しもそうですが、私はどんな外貨でも手に入れようと腐心しています」と書いている。『トーマス・マン全集　別巻』、p. 517. また、彼がアメリカの雑誌『ザ　ダイアル』に「ドイツからの手紙」を執筆して受け取る月々25ドルの外貨で、家族8人がまあまあの生活ができ、寄宿制の学校に通う息子の授業料も賄えたと述べている。Erinnerungen, p. 188. ハイパーインフレーションの時代を生き抜く方策の一つが、外貨の取得であった。また、川口マーン恵美による聞き書きの書『あるドイツ女性の20世紀』によれば、大企業に勤務する社員のなかには給与を米ドルで受け取る契約をして、困難な時代を生き延びたケースもあったとされる（p. 40）。

xxvii 金価格の市中における変動を伝える話が、オストヴァルトの『インフレーション風俗史』に出て来る。1923年12月のこと、ある歯科医が治療用の金冠やブリッジ用に15兆マルクで40g、少なくとも30gは入手できると見込んで発注したが、実際に手にできたのはわずか6gであったという。本注ではカラット数など、細かい話は省いてある。Ostwald, p. 63－64.

xxviii Widdig, p. 90. このエピソードの出所は、Thomas Mann, “Inflation” The Witches Sabbath : Germany 1923. Encounter 44, no. 2 (1975) : 60–64（筆者未見）である。

xxix トーマス・マン『混乱と若き悩み』p. 270. なおWiddig, p. 170－178は、この小説の詳細な分析を行い、インフレーション期のインテリゲンチャの生活様式を再現して見せてい

る。

xxx ゴードン・A・クレイグは子供時代の体験を語りつつ、当時のドイツ人が走っていた、駆けていたという印象を次のように述べている。「1923年、カナダで少年時代を送っていた私は、ある日、5セントの棒飴を買ったが、包み紙の下には1万マルク紙幣がカラフルだが価値のない＜オマケ＞として入っていた。当時のドイツでは、労働者は1日に2度給料を受け取っていたが、次のドル相場の報せが届いて、自分たちの金銭の価値が半減しないうちに、食糧やその他の必需品を購入しようと、葉巻の入っていた箱に高額紙幣を詰めて駆け出していた」（ゴードン・A・クレイグ，p. 195）。

xxxi 1920年代のベルリンでは、貨物輸送用には馬車が使用されており、乳牛や豚がそれぞれ4－5万頭ほど飼われ、50万羽ほどの鶏がベランダで飼育されていたとある。ゲルテマーカー『ヴァイマール　イン　ベルリン』p. 37.

xxxii 大きな社会変動は革命や戦争によっても生じるが、ハイパーインフレーションは、本文中で見たように、金融資産を持つ者・不動産収入で生活していた者・大学教授や文筆家・当時としては極めて恵まれた階層といえる年金生活者などの中間層を壊滅させた。こうした階層に属する人々はすべからくインフレーションの犠牲者であり、トーマス・マンやツヴァイクがインフレーションに対してネガティヴな発言を繰り返しているのも、その所為であり、なんら驚くべきことではない。Zimmermann, p. 11－13. 他方、農牧業経営者、大工場経営者・インフレ利得者・債務者などにとって、インフレーション時代は儲けの多い良き時代であった。もっとも、労働者やホワイトカラーのなかには、賃金を物価変動にスライドさせたりドル換算での支払いを求めたりして、インフレーションからの不利益に対処できた人々もいたという。斎藤哲他編『20世紀ドイツの光と影』p. 35－36. 言うまでもなく、同一の社会集団に属していても個々人によって複雑多様な境遇に陥ることになった。その岐路となったのは、闇商人的根性という不道徳を持ちあわすことができたか否か、緊急避難的犯罪に敢えて手を染めることができたか否かによる。デートレフ・ポイカート『ワイマル共和国』p. 61f. トータルとしては、単純労働に従事していた労働者や失うべきものを何も持たない人々にとって、インフレはホワイトカラーや熟練労働者、インテリとの距離を一挙に縮めるという、社会的地位の相対的改善をもたらしたと言える。

xxxiii 木村靖二，p. 148.「ドイツ政府はインフレーションを承知のうえで意図的に促進させた」にも拘らず、国家に対するドイツ国民の不信感は、ハイパーインフレーションや為替相場の崩落が戦勝国による法外な賠償金額の強要やルール占領という外部圧力の結果であるとする言説の前に、歪められ変質していった。W. フィッシャー、p. 26－31.

参考文献リスト

クリストファ・イシャウッド（中野好夫訳）（1952）『救いなき人々』文藝春秋新社（Christopher Isherwood, Goodbye to Berlin, 1939）

クリストファ・イシャウッド（吉田健一訳）（1952）『山師』文藝春秋新社（Mr.Norris changes trains, 1935）

ジョナサン・ウィリアムズ編（湯浅赳男訳）（1998）『お金の歴史全書』東洋書林（Jonathan Williams, Money, A History, 1997）

H.A. ヴィンクラー（後藤・奥田・中谷・野田共訳）（2008）『自由と統一への長い道　Ⅰ　ドイツ近現代史　1789－1933』（名古屋外国語大学研究叢書）昭和堂

大澤武男（2008）『ユダヤ人最後の楽園—ワイマール共和国の光と影—』講談社

加瀬俊一（1998）『ワイマールの落日—ヒトラーが登場するまで1918－1934—』光人社

エリアス・カネッティ（1985）（岩田行一訳）『耳のなかの炬火—伝記1921－1931—』法政大学

出版局
エリアス・カネッティ（2010）（岩田行一訳）「インフレーションと群衆」『群衆と権力　上巻』所収、法政大学出版局
川口マーン恵美（1995）『あるドイツ女性の20世紀―1900－1993―』草思社
木村靖二・成瀬治・山田欣吾編（2004）『世界史体系　ドイツ史３』山川出版社
ゴードン・A. グレイク（1993）（眞鍋俊二訳）『ドイツ史』みすず書房
マンフレート・ゲルテマーカー・プロイセン文化財団映像資料館編（岡田啓美・渡邉芳子他共訳）（2012）『ヴァイマール　イン　ベルリン』三元社
斎藤哲・八林秀一・鎗田英三編（2008／２刷）『20世紀ドイツの光と影―歴史から見た経済と社会―』芦書房
H. シャハト（越智道順訳）（1935）『戦時経済とインフレーション―ドイツ・マルクの混乱より安定まで―』叢文閣
J. ジョル（池田清訳）（1975）『ヨーロッパ百年史　１・２』みすず書房
ゲオルク・ジンメル（元浜清海・居安正・向井守訳）（1978／1981））『ジンメル著作集　２　貨幣の哲学（分析編）』、『ジンメル著作集　３　貨幣の哲学（綜合編）』白水社
リタ・タルマン（長谷川公昭訳）（2003）『ヴァイマル共和国』白水社
シュテファン・ツヴァイク（原田義人訳）（2010版）『昨日の世界　Ⅰ，Ⅱ』みすずライブラリー
W. フィッシャー（加藤栄一訳）（1982）『ヴァイマルからナチズムへ　ドイツの経済と政治　1918－1945』みすず書房
ジャン＝ジャック・ベッケール＋ゲルト・クルマイヒ（剣持久木＋西山暁義訳）（2012）『仏独共同通史　第一次世界大戦　上下』岩波書店
W. ベンヤミン（野村修訳）（1975／1990）『著作集14巻　書簡集Ⅰ　1910－1928』晶文社
デートレフ・ポイカート（小野清美・田村栄子・原田一美訳）（1993／2004）『ワイマル共和国―古典的近代の危機』名古屋大学出版会
トーマス・マン（竹山道雄訳）（1941）『混乱と若き悩み』新潮社
『トーマス・マン全集　別巻　トーマス・マン研究』（森川俊夫・円子修平他訳）（1972）新潮社
DVD『ドクトル・マブゼ　大賭博師・時代の肖像』『ドクトル・マブゼ　地獄・現代人のゲーム』（初公開1922）、『怪人マブゼ博士　マブゼ博士の遺言』（初公開1932）紀伊国屋書店
Avedias, Argon (2007) Abakkana “Der Bara” Books on Demand GmbH, Norderstedt.（p. 11 - 24にドイツにおける緊急貨幣に関する歴史的概観あり）。
Bullivant,Keith. Editor (1977) Culture and society in the Weimar Republic. ManchesterUP
Feldman, Gerald D. (1997/2003) The Great Disorder. Politics, Economics, and Society in the German Inflation 1914–1924. OxfordUP
Grabowski, Hans-Ludwig ; Mehl, Manfred (3. Aufl. 2009) Deutsches Notgeld. Bd. 1, Deutsches Serienscheine
Guttman, W. & Meehan, P. (1975) The Great Inflation Germany 1919–23. Saxon House.
Guttsman, W. L. (1990) Worker’s Culture in Weimar Germany. Between Tradition and Commitment. Berg
Heller, S. & Fili, L. (2004) EURO DECO. Graphic design between the Wars. Chronicle Books, San Francisco
Kester, Bernadette (2003) Film front Weimar. Representations of the First World War in German Films of the Weimar period (1919–1933), AmsterdamUP
Hrsg. v. Klever, Ulrich (1980) Notgeld. Whilhelm Heine Verlag, München
Müller, Manfred (2011) Deutsches Notgeld. Bd.12 : Das wertbeständige Notgeld der deutschen Inflation 1923/1924.
Ostwald, Hans (1931) Sittengeschichte der In-

flation : Ein Kulturdokument aus Jahren des Marksturzes. Berlin : Neufeld und Henius Verlag.

Widdig, Bernd (2001) Culture and Inflation in Weimar Germany. California.

Zimmermann, Philipp (2004) Die Inflation im Jahr 1923 bei Thomas Mann und Stefan Zweig. Grin Verlag

Reichsfinanzwesen, Wiki Series, Memphis, USA, 2011

Monetazione Tedesca, Wiki Series, Memphis, USA, 2011

Hyperinflation and Notgeld
Sketch of German social history in the beginning of the 1920's

Yoshinobu Mori
Otsuma Women's University

Abstract

Reichsmark-notes and Notgelt-schein on the large amount, were issued and circulated on the market in many German cities during the hyperinflation period. While the sudden rise of consumer prices and the sudden downturn in exchange market price of Deutsche mark progressed, conventional notes and scheins became valueless, and were disposed of as wastepaper. Bank deposit became valueless and the lives of people of the middle class, salaried employees and pensioners failed.

Notgeld was printed throughout in the early 1920s by local governments and companies. It is because the Reichsbank was not able to issue general currency (Reichsmark-note) of a necessary amount. Notgeld circulated only in local communities, yet it proved to be a valuable alternative to the Reichsmark. In this text, the situation of Notgeld's issue was described and the ticket sides were analyzed.

Populace at large encountered unprecedented difficulty. I sketched how they lived in this difficult time. In this case, some testimonies of the coetaneous persons, the photographs and satire drawings at that time, were used as historical materials.

Key Words（キーワード）

Barter trading（物々交換），Elias Canetti（カネッティ），Hyperinflation（ハイパーインフレーション），Christopher Isherwood（イシャウッド），Thomas Mann（トーマス・マン），Notgeld＝emergency money（緊急貨幣），Reichsmark（ライヒスマルク），Rentenmark（レンテンマルク），Hjalmar Schacht（シャハト），Stefan Zweig（ツヴァイク）